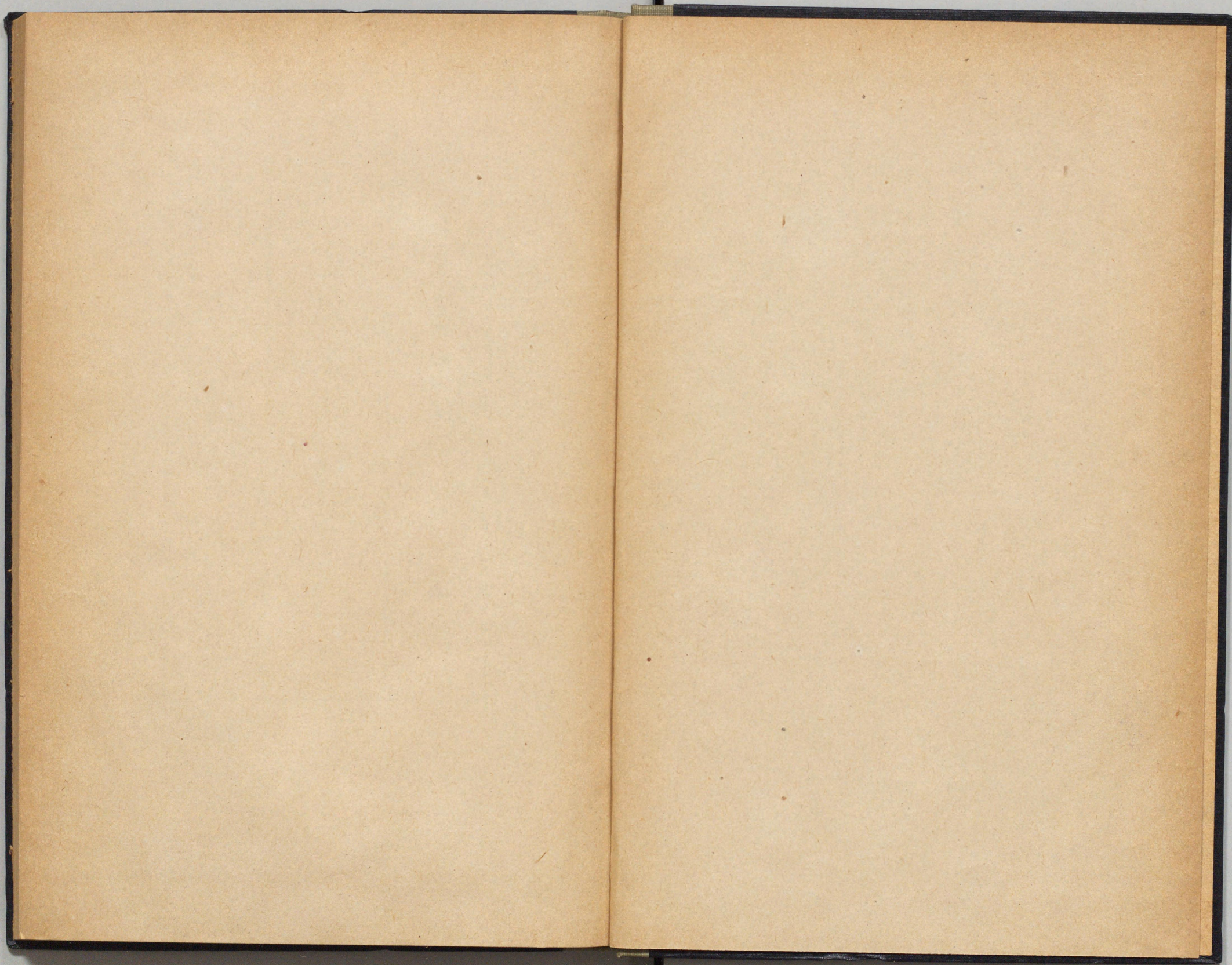


社會經濟調查所編

支那經濟資料 一三

上海米市調查

生活社刊



社會經濟調查所編

支那經濟資料 一三

上海米市調查

生活社刊

611.46
Ty 996.02

引 言

上海は全國商業の中心にして金融の樞紐となり、萬商は雲集して人口稠密の爲め、米穀の運輸消費に於ては、實に重要な地位を占めてゐる。茲には米市場と重要な關係の各點に就て次に従つて列記した。

第一、上海の米穀消費量は、毎年必ず約六百萬市石前後となり、國內各地に冠絶してゐる。上海が米の出產地でないことを願れば、米穀の供給は専ら各地の來源的支援に依據せねばならぬ。常州、無錫、蘇州、松江、太倉の蘇江、浙江に及ぶ境内の産米各地の餘米は、多くは上海が最後の市場となつてゐる以上、安徽、江西、湖南諸省の客棧（ウルチ米）の上海に運輸せられるもの亦尠くなく、而かも、印度、安南、暹羅（現在のタイ國）等の外米の輸入も亦頗る多きを見る可く、民國廿一年（一九三二年）には三、一〇一、七五二市石の巨額に達し、廿二、廿三年の兩年も亦何れも七十餘萬市石の記録を示してゐる。

第二に上海は交通便利にして米市場の組織は又比較的完備し、凡そ國內外の各地より買集せられる米穀は多くは先づ上海に於て接收せられる。故に上海は常に米穀の重要な消費市場たるのみならず、或は又、米穀の主要集散市場としての輸入の米穀も固より多く、而かも、再び輸出するものも亦尠くない。

第三に上海の米價は常に國內の産地米の價格と形影の如く相隨ふのみならず、即ち、諸國の外産地米價と比較しても亦同一歩調の趨勢にある。これ蓋し上海米市場が極めて重要となり、その所定の米價が時には國內外の産地米價の影響を受け、時には亦國內外産地の米價を支配し得るに足るからである。

本會は上海米市場の重要性に鑑み、茲に特派員を派して實地調査せしめ、數ヶ月を費してこゝに起草上梓した。固より遺漏のあることは免れ難いが、尙ほ讀者の進んで教導を賜はらんことを祈る次第である。

民國二十四年二月一日

行政院農村復興委員會秘書處

二

上海米市調査 目次

第一章 上海米市場の概況及び其の組織……………(一)

一 上海米市場の概況……………(一)

二 上海米市場の組織……………(二)

1 經售米糧業(取次販賣米穀業)

2 米客(米販即ち運送販賣の米商)

3 米行(米問屋)

4 米店(小賣米商)

4 碾米廠(精米所)

6 倉庫

第二章 上海食米の輸入……………(三)

一 内河運輸による本國米……………(三)

- 二 鐵道運輸による本國米……………(一一)
- 三 汽船運輸による本國米……………(一二)
- 四 汽船運輸による洋米……………(一三)
- 五 上海食米の輸入總數……………(一四)

第三章 上海食米の輸出……………(一五)

- 一 鐵道運輸により本省及び外省に至るもの……………(一六)
- 二 汽船運輸により外省に至るもの……………(一七)
- 三 汽船運輸により外國に至るもの……………(一八)
- 四 上海食米の輸出總數……………(一九)

第四章 上海食米の消費數……………(二〇)

- 一 人口統計に據る消費量見積……………(二一)
- 二 上海荳米業公會北市辦事處の消費量統計……………(二二)

- 三 上海食米輸出入推算に據る消費量……………(二三)

第五章 上海の米價統計……………(二四)

- 一 民國元年以降上海米價の變動趨勢……………(二五)
- 二 最近米價の變動趨勢……………(二六)
- 三 外省米價格の變動趨勢……………(二七)
- 四 洋米價格の變動趨勢……………(二八)

第六章 運賃……………(二九)

- 一 江蘇、浙江各地と上海間の運賃……………(三〇)
- 二 外省各地と上海間の運賃……………(三一)
- 三 上海より外省各港への運賃……………(三二)
- 四 外國各地と上海間の運賃……………(三三)

第一章 上海米市場の概況及び其の組織

(一) 上海米市場の概況

食米は我が國人民の必要な消費品であるが故に各地の米市場の大小は、大半は人口の稀薄と稠密とによつて決定される。上海に就てこれを言へば、前清、光緒三十二年以前にあつては南市はもと縣治に屬し、人口は稠密にして米行（米問屋）米店は此處に群集し各地からの入港米船は何れも黃浦江一帯に停泊した。他方北市をみれば、住民は稀薄で寂寞であつたが、それと云ふのも只だの郷鎮に過ぎなかつたからである。當時、新開橋には木橋が架り橋下には三つの臺石があつて水流は早瀬となり、船に積んだ荷物は重い毎に危險が多いので、一般の内地の米船はつまり橋畔に停泊して、附近の米行に若干の米を卸し、然る後直ちに南市に向つた。それ故、北市には米行が四、五軒あつたが、併し大部分は他の貨物との兼業であつたので純粹な米業と見做す譯にはゆかない。その後に至つて、人口は漸く多くなり市井も漸く盛んとなつて來てアメリカ商が精米機を搬入して北市に美昌碾米廠（精米所）を創設するに至つたので、支那商も又その碾米廠の附近に源昌碾米廠を開設した。それ以來、内地の米商は陸續として半搗米を上海に運搬し來つて白米として賣出したので、一時は蘇州河に米船が集結し、米行、米店はその運搬で雑沓した。開北の米市場はこれ以後、旭日昇天の勢ひで繁昌した。米行は米船の集合する場處に設けられ、米船は米

行の集中する區域に停泊したので、この相互の關係から南市では三泰碼頭に集中し、北市では蘇州河の新閘橋一帶に集中した。凡そ、常州（武進）無錫、蘇州、松江、太倉の江蘇、浙江に及ぶ地域から運搬して來るものは多くは汽船で運送した。而して、江蘇、安徽の北部から産するものは即ち津浦（天津—浦口）京滬（南京—上海）の兩路で南下した。外米に至つては海から汽船により上海に運ばれた。

（二） 上海米市場の組織

上海米市場の組織は各大都市のものと大體相同じく、茲では取次販賣米穀業（經售米糧業）米客（米販即ち運送販賣の米商）米行（米問屋）米店（小賣米商）及び碾米廠（精米所）の各項に分つて次に縷述する。

1、經售米糧業（取次販賣米穀業）

經售米糧業は一種の仲介業であつて、米行と米客の間に介在し、米客に代つて米穀を一手販賣し、穀量の間を受取つて營業を維持してゐる。即ち凡そ米船が上海に到着するか、或は米穀が精米所へ送られた後に、通常取次販賣業に報告すれば、取次販賣業は見本米の數包を受取り、各米行に販賣に向ひ、米行が品質を檢べた後は、直ちに見本を携へて船着場に赴き扞様（普通扞様一個は約米一升餘）を受取るのである。取次販賣業（經售業）米行、米客の三者が乃ち正式に價格の會談を行つて既に價格が定まれば、斯くて取引をなし、米行は秤量を行つて後、代金を支拂ふのである。併し、米行は一面に於ては、米店に貸付をなさねばならず、一面には又米客に代金を支拂はねばならぬので、資本の大小に論なく、總べては分期支拂を要するのである。而して、本地以外の米客は又急場の間

に合はないので、常に取次販賣業が代つて立替支拂を行ひ資金の廻轉を計るのである。亦、米客にして資本が不充分であれば、取次販賣業者に借款して仕入れ運搬を行ふが、時には米客は全然上海に來らず、只だ書信によつて取次販賣業に全權を委託販賣せしめ、又米代をも代收してもらふのである。若し、米行が倒産するか、或は送金不能に遭遇した場合は、すべて取次販賣業が償還の責を負ふのである。

これを總觀するに、取次販賣業は殆んど中間層の利奪者（每石米客から四分乃至六分の中間金を收得する）であることを知るべきであらうが、併し、金融の調整、擔保立替金に於ての其の功は決して看過すべきでない。

經售米糧業（取次販賣米穀業）は曩きには南市に盛んであつたが、清末葉から上海米市場が南から北へ移轉した後は、南市には僅かに南幫米糧があるだけで、經售業（取次販賣業）は漸次減少した。而して、北市には米廠が林立して米市場が繁盛となつたので經售業も亦此處に集中し、茲に乃ち「米商公會」が設立されたが、併し、實際には僅かに茶會の集合にも等しきもので、決して健全な組織ではなかつた。民國七年（一九一三年）に至つて始めて「滬北經售米糧公會」と名稱を定め、章程を訂立し文章を以て出願した。十七年に委員制に改めたが、中央政府公布の「同業公會法」により以後市商會令に従つて「上海市經售米糧業同業公會」と改組した。現在、上海の經售米糧業は皆で三十八軒あり「廠米經售」と「河米經售」の二種に分れ、前者は他省の米穀（客袖）を精米所へ送る取次販賣業であつて、後者は即ち既に内地に於て精米した内河（長江流域）の米穀を取次販賣するもので、その取次販賣の範圍はつまり「河米」が多い。

2、米客（米販即ち運送販賣の米商）

米客は一名を「米販」と稱し、専ら米の運送販賣をなし、内地の米行、米廠と頗る聯絡がある。普通内地の米行、米廠は農家から米を買入れて米客に轉賣し、米客は購入した米穀を再び上海に運送して取次販賣業に委託販賣せしめ、再び貨幣を受取ることに依つて内地の米穀を買集して上海へ運送販賣するものである。かくの如く米穀の廻轉販賣によつて利得を謀つてゐるが、その運送販賣の客米と洋米（外米）の米客は亦同じである。内地の米客は南北の兩幫に分れ、その中、又地域によつて各幫（販賣業者）に分れてゐるが、常州、無錫の勢力が最も大きい。

3、米行（米問屋）

米行は米客から米穀を購入し、米店（小賣米商）に販賣するものであるが、その性質は米客と米店の仲介者となり、取次販賣業と米客、米行の仲介者として同等の仲介の地位にある。普通、米行と米客との取引が成立すれば、即ち、米行は米店へ販賣に向ひ、若し見本が氣に入れば米行は米店の買入人を同伴して船或は倉庫に赴き、品物を見て正式に價格の商談を行ひ、取引が成立すれば支拂ひの期日をも契約するのである。支拂は一時に拂込む者、三期（每期十五日）に分つて拂込む者もあるが、通常一時拂ひの者に對しては、多く中間の利益を拂戻して勉強振りを示してゐる。

米行の資本は大體一、二萬元程度のもので多く個人資本と合資經營の兩種に分れ、米店全般の事務は經理が之を總攬してその下に店内の弟子數人を置き、各自職を分つてゐる。上海の米行は皆で百二十餘軒あつて、北市に多く、新開橋一帯にも散在してゐる。南市の米行は則ち董家渡、荳市街一帯に集まり、その同業組織は昔は「仁穀堂」と云つたが、今ではつまり「荳米業公會」と改めた。

4、米店（小賣米商）

米店は米穀業中の小賣商で、米行から米穀を購入し消費者へ轉賣するものである。全市には米店約一千餘軒があつてその同業組織は最初は「嘉穀堂公所」と云つたが、次いで「米業商會」と稱し、後ち又改めて「米業公所」となした。民國十七年（一九二八年）委員制に改め、近くは「工商同業公會法規」に順じて又「米號同業公會」と改組した。米店の資本額は米行より小さく、且つ多くは個人資本經營で店主が即ち經理となり、その下に帳場手等を置いてゐる。現在までは米穀專賣の米店は殆んどなく、大部分は麥、麵粉、豆、雜穀等の品物を兼賣し、甚だしきは酒、油及び家庭の日用雜貨を販賣してゐるものすらある。米穀を販賣する所では、北幫の常州、無錫の上等米が多く南市舊城區では多く南幫の松江米を二等米として同時に販賣し、虹口、閘北、浦東、滬西、高昌廟一帯の靜寂な區では何れも秈米（南京米）が賣捌かれてゐる。

5、碾米廠（精米所）

我が國の舊法式の精米は石臼を用ひ、蕭規曹としてそのまゝ數千年に垂んとしてゐる。前清光緒の末年、アメリカ商は精米機を支那に輸入し來つて、滬北（上海北部）の垃圾橋西側に「美昌機器碾米廠」を開設したが、これ上海の精米所の始めである。併し、一般は民風古樸の爲めに敢へて試みようとせず、支那商の「源昌碾米廠」が設立されて後ち、始めて之が轉機となつた。その後、通商、信昌、鎮昌、英昌等の碾米廠が相繼いで、設立され、専ら精米を營んで他の雜貨を兼ねず、茲に於て各地及び内地の行號（店舗）は除々に碾米廠へ精米を委託するのが風習となり、營業は大いに榮え茲に上海碾米廠の黄金時代となつた。當時、精米機は何れも蒸汽發動機を用ひて價格が頗

る高いので、装置するものは極めて尠なかつた。その後、モーター精米機が出現して電氣によつて使用が簡便であり、資本も亦手軽なので米行、米店が相繼いで一、二を装置したので、碾米廠は乃ちその影響を稍々蒙つた。數年後、石油及び揮發油用の發動機が相繼いで發明され、價格も低廉で裝置も亦便利であり、而かも、支那の機械廠が亦この種の機械を製造することが出來たので、これより内地の鄉鎮には頻々として購入設置され、精米工作は又復上海碾米廠を必要としなくなり、上海精米業はこれより大いに衰へた。

現在、上海にて碾米廠を專營するものは十軒にも達せず、南北兩市に分布してゐるが、開北が稍々多い。資本は通常一萬元以内で、その營業は次の三種に分つことが出来る。即ち、(甲)仲介人の精米、(乙)半搗米買入精米、(丙)行號の委託精米に分たれる。併し、米行、米店は多く精米室を附設し、自ら精米する以外に更に他の精米をも兼營してゐる。故に(丙)の如き場合は頗る尠く、又、南北精米も多くは内地で精白した後ち始めて運輸されるので、碾米廠で精米する所の米穀は省米以外のものが多い。

精米機に就て言へば、碾米廠及び米行、米店等全部で七十八部(古物を加算せず)があり、各機械の價格は二百五十元乃至二百八十元内外で、何れも電力轉動、普通に各々十馬力、總計八百馬力となる。各一時間の精米可能量四石前後にして中には七石前後のものもある。精白後の精米取得量は七斗九升乃至八斗八升にして殘餘は粃と糠となり各々粃は一升より三升、糠は九升より一斗五升を得られる。大體半搗米の質の優良なものは粃を得るに割に尠く、白米精米が最も多く糠を得られる。各精穀費に至つては則ち糯米(モチ米)二角七分(二十七錢)、粳米(ウルチ米)二角五分(二十五錢)、秈米(南京米)二角三分(二十三錢)となり各家とも似通つて大きな出入りがない。

6、倉庫

昔の倉庫の制度にあつては、國家が救荒の策及び地方の義舉に備へて、例へば常平倉、積穀倉及び義倉の如きを除く外は、商人方面では初めは大規模の組織がなく、唯だ小賣部の外に餘屋を借り受けて雜貨を堆積しただけであつた。

開港以後、商務は日に盛んになつて人口も日に繁くなり、消費も日に増し需給の數も俱に大きくなつて、奇計を以て競ふ者は漸く蓄積する趨勢となつた。こゝに於て「堆棧」は日々に多くなつて倉庫の雛形が始めて具つて來た。

併し、この種の倉庫は初めは米業の爲めに設けられたものでなかつた。それと云ふのも米の消費量には日に定額があり、その容積は甚だ大きく而かも、家賃が極めて高かつたからである。

況んや、交通が便利であり、運輸が敏速であれば卸買や小賣では米商は之を必要としなかつた。純粹の穀物貯藏の倉庫は現在では僅かに南市の三泰碼頭の「荳米業倉庫」が一つあるだけである。該倉庫の成立は未だ久しくならず、荳米業の合資に依つて建造された資本約三十萬元のもので、地所六畝に大體三階建、收容量約十萬包、平時は充滿しないが冬期には非常に雜沓し、委託者も多く而かも抵當は極めて尠い。

上海の現有の倉庫に就て論ずれば、業務の關係から例へば、銀錢業の抵當の貨物及び汽車、汽船運送の貨物の如く、倉庫に保管される必要からその數は頗る多いので、銀行堆棧、錢莊堆棧及び海關棧堆、鐵路堆棧等々がある。銀行倉庫は何れも北蘇州河兩岸に集中してゐるが、それは麥根路停車場に接近して貨物の運輸に便利であるからである。各大銀行には皆倉庫が有つて、昔は専ら繭絲を取扱つてゐたが、繭價が低落して絲業に失敗した後は、來

源が減少したのでこれから總べて金屬類、綿布類、藥材、煙草、紡績絲、穀物等々の何れもが抵當及び委託品となつた。この種の貨物には各季節性があつて糧食は約十月から漸次倉入れせられ、春以後は逐次持ち出される。併し各倉庫の米穀收容面積總計して二分の一に及ばず、而かも麥、落花生等の穀物をも之に加算してもさうである。純粹な糧食貯藏倉庫は僅かに中國及び上海二銀行に各々その一つがあるだけである。

錢莊堆棧も亦蘇州河一帯に散在し、範圍は大小不同であり、大體、營業は比較的盛んである。外國銀行の發生と關係あるものは「洋棧」と稱し、例へば、豫康、安記、鼎記、鴻記等の如きであつて、然らざるものでも即ち、某某堆棧と稱呼してゐる。その營業も亦委託扱及び抵當物が主であり、只だその間に資本來源の性質から専ら一種類の營業に投資するものもあるが、例へば棉織絲、麵粉等の如きがこれである。

堆棧に關係あるものは外國汽船會社に隸屬してゐるが、凡そ輸出入の貨物は海關の運送者に報告して何れも之に倉入れするのである。

臨時の性質のもので亦客貨が既に抵當となつて、即ち委託品となつてゐるものもあるが、併しそれは僅少の事柄で、一般的のものではない。堆棧に關係ある建物は汽船の碼頭附近、江邊に沿ふ一帯に建てられ、虹口より南市の玉家碼頭に至り、殊に楊樹浦はその地價が廉價の爲めにその建築が多い。大體、價格が高からず、容積の大きなものは此處に荷卸しされるので、糧食が亦多い。

鐵道の貨物は隨處に卸されるので堆棧は多くないが、僅かに麥根路及び虬江路の二ヶ處にある。其の中には各貨物が皆あるが、只だ何れも臨時の一時預けのもので長期間の預けがなく、且つ糧食は極めて少いので宏大な建築に

關係がない。

設備から言へば、大體、二つに分つことが出來、一は永久貯藏の性質を有するもの、一は臨時の性質を有するものである。前者は銀行の倉庫及び錢莊の洋棧、或は堆棧であつて、後者は汽船會社の關棧及び鐵道の貨棧がある。前者の設備は比較的完備してゐて壁は堅固にして、空氣の流通、防火設備は緻密で、地上は乾燥してゐるので收藏貨物の損壞が少く、而して、後者はそれに遠く及ばない。併し、銀行の倉庫及び錢莊の洋棧は亦その建築に従つてその設備を異にしてゐるが、凡そ最近の建築は何れも比較的進歩してゐるので、十年以前のもので即ち非常に簡單健陋で關棧と異なる所がない。設備の完備から云へば、正に浙江興業を推すことができ、管理の進歩に於ては上海銀行が最上である。

營業方面は既に前述した如く、或は抵當、或は委託品となつてゐるが、之を要するに倉庫方面に於ては、只だその倉敷料を領收するのみに過ぎない。各貨物の倉敷料（棧租）は何れも「件」を以て計り、その價格、容積によつて計算されるのである。同業には規定があるが、併し營業の競争から各々減讓があつて、例へば、銀錢業の倉庫の如きは、その倉敷料を引下げ、關棧はその期日を延長してゐるが如き、互に譲り合つてゐるが、只だ商務は不振となつて昔日の如き厚利がない。

抵當の利息は市場の金融相場によつて定まるが、普通には七厘から九厘となつてゐる。倉庫使用料（倉租）は、雜穀にて毎包概ね三分となり、麵粉は毎包即ち九厘となつて、概ね國曆の月によつて計算し、一月不足のものはまた一月として計算する。この點、倉庫業側に最も利益が擧げられるが、それも商人が貨物の格價が高漲してストック

が幾日もなければ、つまり本舗で商賣する爲めに倉庫から隨時に持ち出しを行ひ、一ヶ月の間に同一地點に於て、數ヶ月の倉敷料を領收し得るに至るからである。この前後の關係から雜穀每包四分乃至五分となり、麵粉每包五厘となつてゐる。若し、倉入れが久しくカビが生ずる程でも整理が盛んであれば、每包の取扱賃は一分五厘となつてゐる。輸出貨物は磅を超過することに各包三厘となつてゐるが、併し、これは何れも受取人が自辨するもので倉庫とは關係がない。その貯藏期日は大體、一年以上でも可能である。

第二章 上海食米の輸入

(一) 内河運輸による本國米

上海は人口稠密にして多くは尙ほ米を糧食とし、毎年の米の消費量は數百萬市石に達し、而かも本地產の數量は極めて微々たるが故に、食米の大宗は何れも國內、國外の輸入に頼らねばならず、殊に内河輸入が重要な地位を占めてゐる。内河運輸を南北兩市に分つて調査すれば、南市米業公會は新式碼頭を築構してゐるので、米船が埠頭に著けば每擔一分の釐金税を徴收してゐるから記録としては尙ほ信頼すべきところがある。北市は米が到著すれば、大概多くは取次販賣業の紹介によつて賣買せられるので、取次販賣業公會（經售業公會）は米の到著數量に就ては亦記録をもつてゐる。これら記録の示す所に據れば、民國二十一年（一九三二年）の輸入總計は二、六四四、五七六市石にして、民國二十二年は一、二年来の各地豐作により、輸入は俄然四、〇二九、四六三市石に増加し、去年（民國二十三年）は則ち三、四七五、九〇四市石に降下してゐる。大概毎年十月から翌年の一、二月の間には會々新米の値が上るので輸入は最も多く、南市では一年を通ずる輸入が北市の約二倍を占めてゐる。之を表にて示せば次の如くである。（第一表を見よ）

(二) 鐵道運輸による本國米

上海の陸路交通も又、便利であつて、京滬路、滬杭路があり、近年又津浦各路と聯絡されてゐる。これによつて本國米の鐵道によつて上海に輸入されるのは、毎年無慮數十萬市石に達してゐる。即ち、民國二十一年を以て之を言へば、鐵道輸入は二一一、八二九市石となり、その中、京滬路によるものは畢竟、二一〇、八四〇市石を占め、更にその全部は南京及び南京江邊の兩驛から來たもので、蕪湖等から轉じて來た外省米と思はれる。この外、無錫から搬入された一萬餘市石、その他各地で多くは即ち數千市石、少きは即ち僅に數市石として未だ不足してゐる。(第二表を見よ)

第一表 内河船舶輸送に由り上海搬入の本國米統計表 (單位市石)(1)

年	南 市(3)	北 市(4)	合 計
民國廿一年	一、七六三、四六三	八八一、一二三	二、六四四、五七六
一 月	二〇三、六二八	七七、八二九	二八一、四五七
二 月(2)	—	—	—
三 月	一一五、八〇七	一一、四一〇	一二七、二一七
四 月	一五一、九七七	一六、〇二七	一七八、〇〇四
五 月	一二五、三七九	二七、八六四	一五三、二四三

民國廿二年

月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	合計
六 月	—	—	—	—	—	一二七、七五八	三八、九六四	—	—	—	—	—	一六六、七二二
七 月	—	—	—	—	—	一〇九、四一〇	六〇、二二八	—	—	—	—	—	一六九、六三八
八 月	—	—	—	—	—	九四、四五五	六二、三〇二	—	—	—	—	—	一五六、七五七
九 月	—	—	—	—	—	一〇〇、八三二	七六、二二〇	—	—	—	—	—	一七七、〇五二
十 月	—	—	—	—	—	一四二、四三五	一〇一、二八一	—	—	—	—	—	二四三、七一六
十一 月	—	—	—	—	—	二三二、四八七	一七七、四三七	—	—	—	—	—	四〇九、九二四
十二 月	—	—	—	—	—	三五九、二九五	二二一、五五一	—	—	—	—	—	五八〇、八四六
合計	—	—	—	—	—	二、四三六、七七六	一、五九二、六八七	—	—	—	—	—	四、〇二九、四六三
一 月	—	—	—	—	—	三三九、一〇四	一一一、二一七	—	—	—	—	—	四六〇、三二一
二 月	—	—	—	—	—	一〇三、四三六	七五、九三〇	—	—	—	—	—	一七九、三六六
三 月	—	—	—	—	—	六〇、三四六	一一一、〇一〇	—	—	—	—	—	一八一、三五六
四 月	—	—	—	—	—	二六九、六九二	一二六、八四〇	—	—	—	—	—	三九六、五三二
五 月	—	—	—	—	—	二〇四、七三七	一四七、六三〇	—	—	—	—	—	三五二、三六七
六 月	—	—	—	—	—	一九一、二三七	一三三、一四〇	—	—	—	—	—	三二四、三七七
七 月	—	—	—	—	—	二〇九、一〇〇	一〇六、一八〇	—	—	—	—	—	三一五、二八〇
八 月	—	—	—	—	—	一三九、六七六	一二六、三九〇	—	—	—	—	—	二六六、〇六六
九 月	—	—	—	—	—	一四六、四三九	一三三、六四〇	—	—	—	—	—	二八〇、〇七九
十 月	—	—	—	—	—	二一五、七二六	一三七、六〇〇	—	—	—	—	—	三三三、三二六

民國廿三年			
十一月	十二月	十一月	十二月
二二六、〇〇〇	三三一、二八三	一七〇、二四〇	三九六、二四〇
二、一六、八五九	一六九、六九〇	一九二、八七〇	五二四、一五三
二一六、五〇〇	一九一、六六九	一、三五九、〇四五	三、四七五、九〇四
二一二、五四二	二一〇、二三五	一五一、五一〇	三二一、二〇〇
一七〇、五五〇	一八一、八五〇	九四、三二〇	三一〇、八二〇
二〇〇、二三五	一五〇、〇〇〇	一五八、三一〇	三四九、九七九
一八〇、七六〇	一四六、四五〇	一四八、五六〇	三六一、一〇二
一五〇、〇〇〇	一三四、〇五〇	一三八、七六〇	三〇九、三一〇
一四六、四五〇	一五六、四〇〇	九九、七八〇	三〇〇、〇一五
一三〇、〇〇〇	一八六、九二三	八四、七〇〇	二六六、五五〇
一三〇、〇〇〇		七二、四二五	二二二、四二五
一四六、四五〇		八五、五六〇	二二二、〇一〇
一三〇、〇〇〇		一一五、〇六〇	二四九、一一〇
一五六、四〇〇		九九、〇九〇	二五五、四九〇
一八六、九二三		一一〇、九七〇	二九七、八九三

註 (1) 本表は廿二年一月以前の數字にして原來は「海斛石」單位となり、茲では一海斛石＝一七〇二七市石とし市石に換算せり。

(2) 廿一年二月は上海戦争の影響によつて内河による米の上海搬入なし。

- (3) 南市搬入数は碼頭記録に據る。
- (4) 北市搬入数は經售業公會記録に據る。

第二表 民國二十一年(1932年)

積込驛名	一 月	二 月(3)	三 月(3)	四 月(3)	五 月(3)	六 月
總計	6,286	—	—	—	—	196
京滬路共計	6,093	—	—	—	—	2
安亭	—	—	—	—	—	—
崑山	—	—	—	—	—	—
蘇州	—	—	—	—	—	—
無錫	1,508	—	—	—	—	—
橫林	—	—	—	—	—	—
戚墅堰	269	—	—	—	—	—
常州	1,740	—	—	—	—	—
丹陽	281	—	—	—	—	—
新豐	—	—	—	—	—	—
鎮江	—	—	—	—	—	2
鎮江江邊	—	—	—	—	—	—
高資	—	—	—	—	—	—
下蜀	—	—	—	—	—	—
龍潭	—	—	—	—	—	—
南京	—	—	—	—	—	—
南京江邊	2,295	—	—	—	—	—
滬杭路共計	193	—	—	—	—	194
莘莊	—	—	—	—	—	—
嘉善	133	—	—	—	—	—
王店	—	—	—	—	—	—
斜橋	60	—	—	—	—	—
開口	—	—	—	—	—	194

註：(1)京滬 滬杭兩鐵道總局營業課編查所記錄にして内に聯絡運搬なし。
(3)二月より五月は淞滬戦争にして記録なし。

上海食米鐵道輸入數量表(1)(單位市石)(2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	合 計
718	6,313	40,141	73,194	46,603	38,378	211,829
718	6,313	40,141	73,034	46,480	38,059	210,840
—	—	—	—	—	82	82
—	—	—	—	513	2,154	2,667
—	—	—	255	123	4	382
541	659	4,307	2,593	13	1,647	11,270
4	—	5	—	3	—	12
—	385	—	—	538	808	2,000
173	—	—	531	268	1,668	4,380
—	—	—	210	375	2	868
—	—	—	—	—	5	5
—	—	—	22	—	513	537
—	—	538	786	—	254	1,578
—	—	—	266	721	265	802
—	—	11	—	—	—	11
—	—	—	—	538	269	807
—	269	4,789	9,482	5,934	286	20,760
—	5,000	30,491	58,889	37,904	30,100	164,679
—	—	—	106	123	319	989
—	—	—	13	38	10	61
—	—	—	147	15	309	604
—	—	—	—	70	—	70
—	—	—	—	—	—	60
—	—	—	—	—	—	194

(2)本表は原來公斤單位にして茲では78公斤=1市石として市石に換算せり。

第三表 民國二十二年(1933)年

積込驛名	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
總計	92,372	68,372	142,230	22,757	40,181	20,846
京滬起共計	88,850	65,321	108,551	21,795	38,385	20,090
安亭	—	—	51	—	—	—
崑山	—	769	6,743	—	—	—
蘇州	13	—	12,564	—	539	808
望亭	1,487	—	1,795	—	—	—
無錫	25,551	17,244	62,462	3,423	2,128	5,628
橫林	—	—	—	26	—	13
戚墅堰	—	10,385	—	257	269	1,192
常州	731	885	108	—	898	269
丹陽	282	—	13	—	—	—
鎮江	13	—	—	—	—	—
鎮江江邊	3,872	525	—	—	782	526
龍潭	538	526	269	—	—	282
南京	9,423	4,705	2,385	4,179	4,615	—
南京江邊	46,949	30,282	21,461	13,910	29,154	11,372
滬杭路共計	3,513	3,051	33,679	962	1,796	756
莘莊	—	—	—	13	26	—
松江	—	13	13	—	—	—
楓涇	—	—	256	13	13	13
嘉善	38	64	2,474	141	103	51
嘉興	64	13	5,179	641	654	—
王店	—	—	654	115	641	—
硤石	539	2,935	23,154	39	333	679
斜橋	77	—	1,603	—	—	—
長安	38	—	333	—	26	—
許村	—	—	—	—	—	—
良山門	—	26	—	—	—	—
杭州	—	—	—	—	—	13
拱宸橋	—	—	—	—	—	—
南星橋	—	—	13	—	—	—
閘口	2,757	—	—	—	—	—
聯運共計	—	—	—	—	—	—
担子街	—	—	—	—	—	—
滁州	—	—	—	—	—	—
沙河集	—	—	—	—	—	—
張八嶺	—	—	—	—	—	—
嘉山縣	—	—	—	—	—	—
官店	—	—	—	—	—	—
明光	—	—	—	—	—	—
石門山	—	—	—	—	—	—

註：(1)兩鐵道總局上海站報部の數に據る。

上海食米鐵道輸入數量表(1)(單位市石)(2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	合 計
24,218	46,423	108,371	144,884	55,718	73,448	839,820
23,269	45,859	105,654	138,820	52,154	62,974	771,731
—	—	—	—	—	—	51
—	—	—	—	—	—	7,512
—	38	90	269	—	51	14,372
7,603	4,154	4,679	2,269	1,077	3,382	32,822
—	—	—	—	—	—	39
269	2,269	1,192	269	1,346	1,641	19,089
256	1,077	616	1,808	13	269	7,630
—	—	—	13	—	936	1,244
—	—	692	1,077	551	154	2,487
513	—	2,808	6,795	3,551	385	19,757
269	—	39	949	962	269	4,103
1,359	8,244	14,987	18,115	1,718	6,320	76,050
13,000	8,077	80,551	107,256	42,936	49,564	476,512
949	564	115	1,987	115	628	48,115
—	—	—	—	—	—	39
—	—	—	—	—	—	26
—	—	—	—	—	13	308
115	25	77	89	89	128	3,394
13	513	—	64	13	13	7,167
769	—	—	372	—	—	2,551
26	26	25	1,462	13	64	29,295
13	—	—	—	—	13	1,706
—	—	13	—	—	—	410
—	—	—	—	—	—	321
13	—	—	—	—	—	26
—	—	—	—	—	—	26
—	—	—	—	—	38	38
—	—	—	—	—	38	51
—	—	—	—	—	—	2,757
—	—	2,602	4,077	3,449	9,946	19,974
—	—	—	—	51	385	436
—	—	2,051	2,436	1,782	2,936	9,205
—	—	—	—	526	1,025	1,551
—	—	—	872	—	1,666	2,538
—	—	—	513	513	1,346	2,372
—	—	—	—	577	1,026	1,603
—	—	551	256	—	513	1,320
—	—	—	—	—	949	949

(2)本表は原來公噸(1,000公斤)單位にして茲では78公斤=1市石とし市石に換算せり

第四表 民國二十三年(1934)上海

積込驛名	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
總計	77,333	45,256	27,833	50,064	94,923	60,230
京滬路共計	51,282	14,333	8,052	14,923	33,205	9,897
蘇州	13	—	—	13	—	115
無錫	6,167	1,487	3,385	859	—	4,526
橫林	62	—	26	—	—	384
戚墅堰	3,500	1,295	923	538	2,487	538
常州	269	13	—	51	51	—
奔牛	—	—	—	269	—	—
丹陽	410	—	—	—	—	—
鎮江	—	—	13	—	13	—
鎮江江邊	—	—	269	539	3,141	513
龍潭	13	13	13	141	—	—
南京	4,179	2,346	269	295	1,346	—
南京江邊	36,705	9,179	3,154	12,218	26,167	3,831
滬杭路共計	564	51	1,384	962	13	—
楓涇	—	—	—	13	—	—
嘉善	77	38	13	64	—	—
嘉興	13	—	51	13	13	—
王店	359	—	1,115	321	—	—
硤石	38	13	205	38	—	—
斜橋	64	—	—	—	—	—
長安	13	—	—	13	—	—
杭州	—	—	—	13	—	—
拱宸橋	—	—	—	487	—	—
聯運共計	25,487	30,872	18,397	34,179	61,705	50,333
浦鎮	—	384	—	—	—	—
東葛	1,269	1,282	—	—	—	—
烏衣	—	1,026	513	513	—	513
担子街	—	—	—	385	384	513
滁州	4,423	6,256	4,474	11,282	20,513	20,333
沙河集	1,923	1,538	385	1,282	4,102	3,816
張八嶺	3,051	2,051	1,795	2,089	2,821	1,795
嘉山縣	346	385	384	2,436	2,564	2,244
管店	3,308	4,077	1,795	2,128	5,628	3,487
明光	8,692	11,295	5,974	8,333	13,641	7,462
石門山	1,962	744	—	—	1,795	416
小溪河	531	795	—	513	795	38
臨淮關	—	—	—	—	—	89
蚌埠	—	1,026	3,077	5,218	9,462	9,603
蘭谿	—	13	—	—	—	—

註：(1)兩鐵道總局上海站報部の數に據る。

(3)六月以後の數字は鐵道局にて未整理の爲め記入せず。

食米鐵道輸入數量表(1) (單位市石) (2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	一月至六月 合計(3)
						355,639
						131,692
						141
						16,424
						436
						9,283
						384
						269
						410
						26
						4,460
						180
						8,435
						21,244
						2,974
						13
						192
						90
						1,795
						294
						64
						26
						13
						487
						220,973
						384
						2,551
						2,565
						1,282
						67,281
						13,076
						13,602
						8,359
						20,423
						55,397
						4,911
						2,654
						89
						28,386
						13

(2)本表は原來公噸(1,000公斤)單位にして茲では78公斤=1市石として市石に換算せり

民國二十一、二十二兩年は何れも豊作と云はれるが故に、二十二年の上海の鐵道輸入による米穀は極めて活潑となり、總計八三九、八二〇市石に達して、即ち京滬路が最も多く、七七一、七三一市石に達してゐる。滬杭路は之に次いで四八、一一五市石となつてゐる。聯絡運送のものは最も少く、一年を通じ只だ一九、九七四市石に過ぎぬ。再び、積込各驛に就て之を言へば、即ち、京滬路の中、南京（江邊を包括す）が最も重要となり、皆で五五二、五六二市石に達し、亦、蕪湖等から轉送されて來たものと思はれる。無錫は之に次いで一三九、六〇三市石となり、鎮江（江邊を包括す）戚墅堰も又二萬市石があり、蘇州一萬餘市石、その他、各地の多くは亦、只だの數千市石に過ぎない。滬杭路の中、硤石、嘉興、嘉善各驛の多くは殆んど未だ取るに足りない。聯絡運送の中では滁州を以て最多となすが、これ亦、未だ一萬市石を超すに過ぎず、之を京滬、滬杭兩路に較ぶれば、實にその下の中心とも稱すべきところである。（第三表を見よ）

廿三年の輸入數字は鐵道局が尙ほ未だ整理が完成してゐないので、その全貌を窺ふことが出来ないが、その年の先づ六ヶ月までは輸入總計三五五、六三九市石となつてゐる。その中、聯絡運送の數字は、廿二年末には一躍首位を占め、二二〇、九七三市石に達してゐる。京滬路は一三一、六九二市石となり、滬杭路は僅かに二、九七四市石に過ぎない。聯絡運送は尙ほ滁州を以て首位となすが、計六七、二八一市石となり、明光は之に次いで五五、三九七市石となり、蚌埠、管店兩驛は亦各々二三萬市石となつて、沙河集及び張八嶺は又一萬餘市石となつてゐる。京滬路の中では尙ほ南京（江邊を包括す）が多くて九九、六七九市石に達し、無錫は之に次ぎ一六、四二四市石となり、戚墅堰及び鎮江（江邊を包括す）は各々數千市石となつてゐる。滬杭路の中では王店がその數稍々多いが、殘

餘のものは殆んど取るに足りない。（第四表を見よ）

（三） 汽船運輸による本國米

汽船により上海搬入の本國米は、海關の毎年の統計作成により「海關報告年報」に發表されてゐるが、月の統計に於ては、これが缺如してゐるので、本節では之を示すことが出來ず、只だ一年の總數のみとなつてゐる。これに據つて輸入を見れば、民國二十一年は九三、〇七一市石となり、次年は増加して四二七、八一四市石となつてゐるが、これは廿一、廿二兩年の秋の收穫が豊作であつた爲めで、安徽、江西、湖南、湖北の各地が盛んに上海へ運送販賣したからであり、汽船輸入の數量も亦大いに増加してゐる。若し、廿三年の輸入數字に據らんとすれば、即ちこの年の海關年報は未だ公にされてゐないので、これを求めることは出來ない。

（四） 汽船運輸による洋米

我が國の洋米（外國米）の輸入は既に普通の現象となり、上海は人口稠密、交通便利の爲めに、西南各省を除けば、實に洋米輸入の一大埠頭となつてゐる。例へば、民國二十一年の輸入の如きは、三、一〇一、七五二市石となり全國輸入總額（一七、六九二、三二九市石）の百分の一七・五三となり、二十二年には輸入は減じて七三一、七九三市石となつて全國輸入總額（一六、七一一、〇七五〇市石）の百分の四・三八となつてゐる。この年は財政部が全國海關に通令し、十二月十六日より洋米輸入税として毎石一金單位を徴收することとなつたので、上海洋米の輸入はこ

れより急に減じた。二十三年の七月以前には殆んど輸入がなかつたが、近く數ヶ月來、始めてこのどん底から漸く増加を示し、二十三年の輸入總計は七八〇、二一七市石となり、全國輸入總額（九、八八七、九三四市石）の百分の七・八九となつてゐる。茲に上海輸入の洋米を全國輸入の洋米と比較して參考に供すれば、次表の如くである。（第五表を見よ）

上海の洋米の輸入は廿二年十二月十六日の徵稅以後、一時は殆んど跡を絶つたが、廿三年七月以後は、又復輸入され一起一落して上海洋米の價格の固定が望まれた。蓋し、輸入稅徵收は即ち資本の増加となり、必ず賣値が上高して始めて利益を圖ることが出来るからである。併し、上海洋米の價格は徵稅以後、初めて國米との競争關係により單獨値を張ることが出来ず、各種の洋米賣値は毎市石始終六元前後となつたので、洋米の輸入は一時は殆んど跡を絶つた。二十三年七月以後、各省の旱魃によつて、上海の殘品は漸く薄弱となり、國米の價格も漸く固定し始めたので、これより各種洋米の價格も又、相繼いで上昇し六元より七、八元乃至九元となり、更に九元以上に上昇せんとし、以前の價格と較べれば何れも二元以上の高値となり、大部分は輸入稅を補つて餘り有るが故に、洋米の輸入はこれより漸次舊に復するかの觀となつた。

上海洋米の來源を檢討するに、印度（ビルマ内）、安南、シヤム（タイ國）、の三ヶ處が多きを占め、平均百分の九十以上を占めて、殘餘は香港、日本各地の如きが之に介在するが、その數量は極めて尠ない。これ蓋し、印度等が我が國に接壤して米の產額豊富にして殘餘を輸出することが出来るからである。例へば、民國二十一年の輸入の如きは總計三、一〇一、七五二市石の中、印度、安南、シヤム（タイ國）三ヶ處は即ち、二、九一七、九七一市石を占

め、民國二十二年の輸入七三一、七九三市石では以上の三ヶ處は即ち、七一九、四九六市石を占めてゐる。民國二十三年は印度の米の需要が特に盛んであつたが、シヤムは殆んど輸出がなく、而かも、三ヶ處總計で尙ほ七一、五一二市石に達し、之を輸入總數の七八〇、二一八市石に比較すれば、實に殆んど相違がなく、茲に上海輸入の洋米を國別に示せば次表の如くなる。（第六表を見よ）

第五表 上海輸入の洋米と全國輸入洋米の比較表

年 月	上海輸入(市石)		全國輸入(市石)		上海輸入と全國輸入の百分比
	上海輸入(市石)	全國輸入(市石)	上海輸入(市石)	全國輸入(市石)	
民國廿一年	三、一〇一、七五二	一七、六九二、三二九	一七・五三		
一 月	一五八、一七七	一、三五二、一四六	一・七〇		
二 月	一一八、三一六	一、〇八九、四九二	一〇・八九		
三 月	三四七、五三六	一、九一〇、〇八五	一八・一九		
四 月	三七九、一九一	二、二四一、七六三	一六・九一		
五 月	七〇九、〇一七	五、三三五、九五三	三〇・三五		
六 月	五三六、一二五	一、五六七、一一八	三四・二一		
七 月	三二四、九二二	一、四八四、八五六	二一・八八		
八 月	三〇四、一五八	一、三〇七、二七五	二三・二七		
九 月	一六〇、一二二	九八六、九六〇	一六・二二		
十 月	三一、六二四	一、三〇八、一九八	二・四二		

第六表 上 海 洋 米

年 月	印 度 (緬甸在內)	安 南	暹 羅	香 港	日 本
民國廿一年	2,152,485	742,045	23,441	10,336	2,374
一 月	106,050	52,113	—	14	—
二 月	46,276	66,185	—	—	2,019
三 月	123,161	72,209	—	814	353
四 月	276,797	102,373	—	21	—
五 月	593,976	98,532	—	2,083	—
六 月	491,788	67,510	2	6,817	—
七 月	233,365	90,168	1,361	28	—
八 月	201,409	88,949	10,650	—	2
九 月	77,911	76,884	6,557	14	—
十 月	8,869	22,245	—	512	—
十一 月	10,951	3,082	4,858	33	—
十二 月	11,942	1,745	13	—	—
民國廿二年	307,255	86,618	325,623	8,646	—
一 月	34,036	37,770	—	7,907	—
二 月	19,398	12,317	56,357	15	—
三 月	105,999	4,567	269,276	20	—
四 月	3,306	6,806	—	—	—
五 月	20,608	12,098	—	—	—
六 月	12	2,564	—	22	—
七 月	78,643	10,476	—	—	—
八 月	12,586	—	—	—	—
九 月	1	—	—	84	—
十 月	32,607	—	—	—	—
十一 月	47	—	—	28	—
十二 月	12	—	—	510	—
民國廿三年	110	590,068	121,334	52,748	18
一 月	9	—	—	—	2
二 月	20	—	—	3	—
三 月	3	951	5	6	1
四 月	—	—	27	8	—
五 月	9	—	—	14	—
六 月	3	—	—	1	—
七 月	10	—	8	5	8
八 月	—	29,237	—	9,856	—
九 月	8	119,660	1,108	21,235	3
十 月	8	77,423	1,422	9,067	—
十一 月	40	232,070	70,990	—	—
十二 月	—	131,027	47,774	11,953	4

註：本表は海關報告書に據り擔を單位とし、茲には一擔=0.7801833市

輸 入 國 別 表 (單位市石)

海峽殖民地 と馬來聯邦	關東租借地	其他各國	合 計	復往外洋	淨 數
—	—	175,035	3,105,716	3,964	3,101,752
—	—	—	158,177	—	158,177
—	—	3,836	118,316	—	118,316
—	—	150,999	347,536	—	347,536
—	—	—	379,191	—	379,191
—	—	14,426	709,017	—	709,017
—	—	8	536,125	—	536,125
—	—	—	324,922	—	324,922
—	—	5,766	306,776	2,618	304,158
—	—	—	161,456	1,344	160,112
—	—	—	31,626	2	31,624
—	—	—	18,874	—	18,874
—	—	—	13,700	—	13,700
—	—	6,565	734,717	2,924	731,793
—	—	—	79,773	—	79,773
—	—	6,553	94,640	—	94,640
—	—	—	379,862	2	379,860
—	—	—	10,132	59	10,073
—	—	—	32,706	—	32,706
—	—	—	2,598	1,442	1,156
—	—	—	89,119	1	89,118
—	—	—	12,586	—	12,586
—	—	6	91	1,420	1,329
—	—	6	32,613	—	32,613
—	—	—	75	—	75
—	—	—	522	—	522
3,760	11,385	796	780,219	1	780,218
—	—	—	11	—	11
—	—	—	23	—	23
—	—	—	666	—	666
2,791	—	—	2,826	—	2,826
—	—	—	23	—	23
—	—	—	4	—	4
969	—	—	1,000	1	999
—	632	1	39,726	—	39,726
—	—	—	142,014	—	142,014
—	768	—	89,288	—	89,288
—	7,317	571	311,038	—	311,038
—	2,618	224	193,600	—	193,600

石として市石に換算セリ。—は未だ輸入なし。

(五) 上海食米の輸入總數

前に既述した如く、上海食米の大半は國內及び國外の供給に頼らねばならず、毎月の輸入は多少の相違があるが通常は前年の十月から次年の一二月の間が輸入は比較的多い。總計一年の輸入は多くは六百萬市石以上であつて、例へば民國二十一年の如きは六、〇五一、二二八市石となり、民國二十二年は六、〇二八、八九〇市石となつて、去年（民國二十三年）一年の數字は鐵道局總計は未だ全部整理されず、海關輸出統計も又未發表のため、一時據るべき統計がないが、先づ六ヶ月間の總計は既に二、三二〇、二三三市石に達し、その中、汽船輸入の總數を計算に入れず各地の荒廢、人心浮動を加へて一年の輸入は亦、正に六百萬市石前後となつてゐる。食米運輸の方法に就て調査すれば内河、鐵道、汽船及び海外の四種に外ならないが、就中、内河輸入が最も多く、これが爲め江蘇、浙江の産米各區は内河に接近して、而かも内河の帆運は、更に自由に荷物の積卸しに諸種の便利がある爲め、他の運輸方法及ぶ所でなく、例へば、民國二十一年の内河輸入の如きは二、六四四、五七六市石となり、輸入總數の百分の四三・七〇を占め、民國二十二年の内河輸入は四、〇二九、四六三市石となつて輸入總數の百分の六六・八四を占め、去年（民國二十三年）の内河輸入では三、四七五、九〇四市石となつて亦、輸入總數の百分の五〇前後を占めてゐる。上海輸入の洋米は民國十五年以後、その數は頗る見る可きものがあるが、民國二十一年の上半期は水害があつたに加へて、更に九・一八及び次年の一・二八兩事變の爲め、人心兢々として寧日なく、洋米の輸入は遂ひに三、一〇一、七五二市石に達して、これまでの中で第一位を占めるに至つた。民國廿一、廿二兩年は收穫は大豐作ではあつ

たが、民國二十二年の輸入は亦、七三一、七九三市石に達した。二十二年十二月十六日以降の洋米徵稅以後は上海の洋米は、一時殆んどその跡を絶つたが、併し、去年（民國二十三年）八月には又、各地の旱魃があつて秋期收穫は大減し、洋米の輸入は又、月を追つて漸高し、一年の上海輸入總計は即ち、七八〇、二一八市石の多きに達した。茲には上海食米の輸入を内河、鐵道、汽船及び海外輸入の各項に分つて示せば次表の如し。（第七表を見よ）

第七表 上海食米輸入總數表（單位市石）（一）

年 月	内河輸入（2）	鐵路輸入（3）	汽船輸入 の本國米（4）	汽船輸入 の外國米	合 計（5）
民國廿一年	二、六四四、五七六	三三、六八六	三、一〇一、七五二	六、〇八七、〇一四	八、四二五、〇四〇
一 月	二八、四七五	六、二八六	一五八、一七五	四四、五三〇	四四、五三〇
二 月	一	一	一	一	一
三 月	二七、二二七	一	一	一	一
四 月	一、八、〇〇四	一	一	一	一
五 月	一五、二四三	一	一	一	一
六 月	一六、七三三	一六	一	一	一
七 月	一六、六三八	七六	一	一	一
八 月	一五、七五七	六、三三三	一	一	一
九 月	一七、〇五二	四、一四二	一	一	一
十 月	二四、七六六	七、一四四	一	一	一
十一 月	四〇、六四四	四、六六三	一	一	一
十二 月	五〇、八四八	六、三六六	一	一	一

第三章 上海食米の輸出

(一) 鐵道運輸により本省及び外省に至るもの

上海が常に米穀の主要消費市場であるのみならず又、米穀の主要集散市場であることは、前に既に之を述べた。故に、米穀の上海から鐵道經由で他處へ運輸されるものも又、無い譯でないが、只だその數量は大きくないだけである。民國二十一年のこれが輸出は二九七、九三一市石となり、その中、滬杭路が最も多く一八五、九八六市石に達し、京滬路は之に次いで一〇〇、七八〇市石となり、聯絡運輸は即ち只だの一一、一六五市石のみである。京滬の中、南京（江邊を包括す）が最も多く、計三四、八〇七市石となるが、但し、同年南京（江邊を包括す）から上海へ運輸した一八五、四三九市石と比較すれば即ち、その數量は多くない。

この外、鎮江（江邊を包括す）常州、戚墅堰も亦各運出したものは二萬餘石或は一萬餘石ある。聯絡運輸に至つては、その種類が頗る少いため稱述するに足りない。（第八表を見よ）

廿二年の上海食米の陸路輸出は只だ三四、五〇〇市石にして、その中、京滬路が多くを占め二五、八四六市石に達し、滬杭路は之に次いで八、一九二市石となる。聯絡運輸は最も少く、只だの四六二市石となつてゐる。各驛に到達したものを以て言へば、即ち、京滬路では南京（江邊を包括す）が最も多くして計一八、八二一市石となり、同

年南京（江邊を包括す）より上海に至つた五五二、五六二市石を以て見れば、取るに足りない。滬杭路は即ち、殆んど全數量が開口に運ばれ、聯絡運輸の數量の極めて少ないことは贅言を要せぬ。（第九表を見よ）

民國廿三年の輸出數字は、只だ前六ヶ月の統計の完成にあつて、即ちこの半年の數字を廿二年度の數字と比較すれば、進展は多々となり、總計は四八、四七五市石となる。就中、滬杭路が一躍首位を占めて四五、三二二市石に達し、京滬路が第二位に退下して二、四二三市石となつてゐる。聯絡運輸に至つては、その數量は尙ほ最少であつて只だの六九二市石となつてゐる。廿二年の浙江米の凶作によつて廿三年の上半年の輸入は激増してゐるので、殊に開口、拱宸橋、硤石の諸驛が最も多く、京滬路は常州米の輸入が比較的多い。聯絡運輸に至つては即ち、稱述するに足りない。（第十表を見よ）

(二) 汽船運輸により外省に至るもの

上海の地は全國水陸交通の咽喉を扼し、各種の貨物は多くは先づ上海へ搬入され、再び此處より他の埠頭へ轉運される。食米に至つても又、之と同様である。民國廿一年の汽船に由る輸出の本國米を見れば、九〇、八八四市石となり、次年は突増して二、一三五、二四六市石に達してゐるが、それは一二年來、豐作收穫のため内地食米が多く上海へ搬入され、再び上海より福建、廣東の米不足の各地へ轉運されたが爲めである。故に民國廿二年の汽船運輸の激増は即ち、必然の事にして怪しむに足りない。その廿三年の汽船運輸の數字は、海關の月別による統計がなく、該年の年報も未發行の爲め姑く論述を措くこととした。

第八表 民國廿一年上海

到達站名	一 月	二月(3)	三月(3)	四月(3)	五月(3)	六 月
總 計	5,947	—	7,756	23,026	61,232	54,077
京滬路共計	4,024	—	—	—	—	42,808
無錫	—	—	—	—	—	—
戚墅堰	256	—	—	—	—	385
常州	1,154	—	—	—	—	654
丹陽	256	—	—	—	—	269
新豐	256	—	—	—	—	—
鎮江	269	—	—	—	—	—
鎮江江邊	1,295	—	—	—	—	256
南京	538	—	—	—	—	10,462
南京江邊	—	—	—	—	—	782
滬杭路共計	1,923	—	7,756	23,026	61,232	41,269
松江	—	—	—	—	64	—
硤石	—	—	641	—	9,487	397
斜橋	—	—	—	—	—	—
長安	—	—	—	—	—	—
臨平	—	—	—	—	577	—
艮山門	—	—	—	1,282	321	—
杭州	—	—	962	962	—	—
拱宸橋	—	—	2,756	9,885	46,744	40,872
南星橋	—	—	—	1,923	321	—
閘口	1,923	—	3,397	8,974	3,718	—
聯 運 共 計	—	—	—	—	—	—
蚌埠	—	—	—	—	—	—
濟南	—	—	—	—	—	—
天津	—	—	—	—	—	—

註：(1)兩鐵道總局營業課編查所記錄に據る。

(3)京滬路の二月より五月及び滬杭路の二月は淞滬戦争により記録なし。—は未だ輸出なし。

食米鐵道輸出數量表(1)(單位市石)(2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一月	十二月	— —
58,702	73,206	2,820	—	2,516	8,649	297,931
36,153	46,885	910	—	—	—	100,780
—	654	—	—	—	—	654
3,962	5,821	256	—	—	—	10,680
4,179	17,641	—	—	—	—	23,628
910	1,051	269	—	—	—	2,755
—	—	—	—	—	—	256
1,380	269	—	—	—	—	1,846
11,900	13,603	—	—	—	—	26,154
14,256	7,192	—	—	—	—	32,448
538	654	385	—	—	—	2,359
22,549	26,321	1,910	—	—	—	185,986
—	—	—	—	—	—	64
2,331	321	641	—	—	—	13,818
—	1,795	641	—	—	—	2,436
—	1,551	—	—	—	—	1,551
—	—	—	—	—	—	577
—	—	—	—	—	—	1,603
—	—	—	—	—	—	1,924
6,333	—	—	—	—	—	106,590
—	—	—	—	—	—	2,244
13,885	22,654	628	—	—	—	55,179
—	—	—	—	2,516	8,649	11,165
—	—	—	—	—	455	455
—	—	—	—	1,026	1,026	2,052
—	—	—	—	1,490	7,168	8,658

(2)本表は公斤單位となり茲には78公斤=1市石として市石に換算す。

第九表 民國二十二年上海

到達站名	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
總計	13	—	—	25,949	3,000	2,897
京滬路共計	13	—	—	25,782	—	—
無錫	—	—	—	192	—	—
常州	—	—	—	321	—	—
鎮江	13	—	—	1,064	—	—
鎮江江邊	—	—	—	4,615	—	—
龍潭	—	—	—	718	—	—
南京	—	—	—	18,808	—	—
南京江邊	—	—	—	64	—	—
滬杭路共計	—	—	—	167	3,000	2,474
杭州	—	—	—	—	—	13
拱宸橋	—	—	—	—	—	—
南星橋	—	—	—	13	—	—
閘口	—	—	—	154	3,000	2,461
聯運共計	—	—	—	—	—	423
蚌埠	—	—	—	—	—	423
徐州	—	—	—	—	—	—

註：(1)兩鐵道總局上海驛報部數に據る。

食米鐵道輸出數量表 (1) (單位市石)(2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	合 計
1,141	1,115	231	64	13	77	34,500
—	—	—	—	13	38	25,846
—	—	—	—	—	—	192
—	—	—	—	—	—	321
—	—	—	—	—	—	1,077
—	—	—	—	—	38	4,653
—	—	—	—	—	—	718
—	—	—	—	13	—	13,821
—	—	—	—	—	—	64
1,141	1,115	231	64	—	—	8,192
26	—	13	26	—	—	78
—	13	13	—	—	—	26
13	12	13	—	—	—	51
1,102	1,090	192	38	—	—	8,037
—	—	—	—	—	39	462
—	—	—	—	—	—	423
—	—	—	—	—	39	39

(2)本表は公噸(1,000公斤)が單位となり、茲には78公斤=1市石として市石に換算す。—は未だ輸出なし。

第十表 民國二十三年上海

到達驛名	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
總計	321	64	13	4,769	33,000	10,308
京滬路共計	38	13	—	13	1,564	795
常州	—	—	—	—	1,551	654
鎮江	—	—	—	13	13	141
南京	38	13	—	—	—	—
滬杭路共計	283	51	13	4,756	31,436	8,821
硤石	—	—	—	—	9,782	1,897
嘉興	—	—	—	—	—	13
長安	—	—	—	—	—	13
艮山門	—	—	—	—	257	—
杭州	39	38	—	—	—	—
拱宸橋	—	—	—	—	12,718	—
南星橋	—	13	13	—	551	13
閘口	244	—	—	4,750	8,128	6,885
聯運共計	—	—	—	—	—	692
鄭州	—	—	—	—	—	551
北平	—	—	—	—	—	141

註：(1)兩鐵道總局上海驛報部數に據る。

(2)六月以後の數字は鐵道局の尙ほ未整理により闕く。

食米鐵道輸出數量表(1) (單位市石)(2)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	一月至六 月合計
						48,475
						2,423
						2,205
						167
						51
						45,320
						11,679
						13
						13
						257
						77
						12,718
						190
						20,013
						692
						551
						141

(2)本表は公噸(1,000公斤)となり、茲には78公斤=1市石として市石に換算す。

(三) 汽船運輸により外國に至るもの

我が國の食米は毎年輸出があるが、只だ數量は遠く洋米の輸入の多きには及ばず、輸出目的地は大部分は關東州租借地及び香港、日本、英米も亦少數を占めてゐる。上海に於て之を言へば、毎月の輸出數は百市石より數千市石に達して等しくないが、民國廿一年度は合計九、一六四市石となつて全國輸出總額(二八、一三三市石)の百分の三二・五七を占め、民國二十二年は上海の在米が極めて豊富であつた故に、輸出は突増して七〇、〇三八市石となり全國輸出總額(八〇、八七五市石)の百分の八六・六〇を占めてゐる。廿三年上半年の輸出は尙ほ見る可きものがあるが、七月以後は上海自身が既に米恐慌を感じ、少くとも餘米は外國へ供給するが爲めに、一年の輸出總計は六六、九五四市石となり、全國輸出總額(八七、三三八市石)の百分の七六・六六を占めてゐる。茲には民國二十一年以來の上海食米輸出と全國食米輸出とを比較して左表に示す。(第十二表を見よ)

(四) 上海食米の輸出總數

上海食米輸出も亦、内河、鐵道、汽船及び海外輸出の四項に分つことが出来る。その中、内河輸出は記載が無いので統計の法がない。上海食米輸入は大部分は上海市の消費に充當され、その外國への轉運數量は比較的少なく、例へば民國二十一年の如きは鐵道、汽船及び海外の三項の總計は只だの三九七、九七九市石に過ぎない。民國二十二年は突然増加して二、二三九、七八四市石となり、之が原因は一、二年來の豐作により上海埠頭の米ストックを即ち

他處へ搬出せざるを得なかつたが爲めである。二十三年に至つては、上海の輸出總數は鐵道局統計が尙ほ全部未整理の爲めと、海關の輸出報告をも未發表の理由から一時の計算が出来なかつた。

更に各項輸出の占むる地位に就て之を言へば、民國廿一年は鐵道輸出が最も多く二九七、九三一市石となつてゐる。民國二十二年の汽船輸出はストック極めて豊富により二、一三五、二四六市石に激増し、總輸出の絶對多數を占めてゐる。海外輸出の一項に至つては、民國廿一年は一萬市石に及ばず、民國二十二年及び民國二十三年は何れも只だの七萬餘市石に過ぎずして、之を上海輸入の洋米と比較すれば、直ちにその道理を知ることが出来る。茲に各項輸出の數字を詳細に示せば次表の如し。(第十二表を見よ)

第十一表 上海米輸出と全國輸出比較表

年 月	上海輸出(市石)	全國輸出(市石)	上海輸出の全國輸出百分比
民國廿一年	九、一六四	二八、一三三	三三・五七
一 月	五六〇	一、九二四	二九・一一
二 月	九七四	二、八三一	三四・四〇
三 月	二二九	三、七八八	六・〇五
四 月	五六二	三、七九九	一四・七九
五 月	一、一一三	二、八七七	三八・六九
六 月	一、四〇三	二、九六二	四七・三七
七 月	七六〇	一、五五七	四八・八一
八 月	一、二〇五	一、九九八	六〇・三一

月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
一、六九〇	一、七八二	一、七八九	一、六六二	一、一六二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇
一五、八八三	八、三一七	一、六六二	一、一六二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇
七、一九四	八、三一七	一、六六二	一、一六二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇
八八二	一、六六二	一、一六二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇
四二四	一、一六二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇
三八二	九六七	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇
四〇八	一、二五〇	一、四一九	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇
九〇一	二、六七九	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇
八五六	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇	一、二八〇

註 本表は海關報告書に據り廿三年二月以前は擔が單位となり、廿三年二月以後は公擔が單位となつてゐるが、茲には一擔＝〇、七八〇一八市石、一公擔＝一、二八〇二五市石を以て市石に換算せり。

[illegible]

第四章 上海食米の消費數

(一) 人口統計に據る消費量見積

上海食米の消費量は完全なる統計なき爲め、上海の食糧問題を研究する者は、これを苦痛としないものはない。茲では統計に據り、年齢別、性別、籍別の諸項に分つて詳細なる消費量見積を試みんとするにある。上海市の地方協會二十二年出版の「上海市統計」に據れば、民國廿一年（統計數字は二十一年までを記載）の上海全市の人口は皆で三、一三三、七八二人となり、中國人は三、〇六三、九八五人を占めてゐる。今北方人民（河北、河南、陝西、甘肅、青海、山東、山西、遼寧、吉林、黑龍江、察哈爾、熱河、西康、寧夏諸省及び北京、天津、青島、哈爾濱諸市）を見れば、上海市の區内に居住する者は六二、二六九人となり、約該區内の人口總數の百分の四、共同租界及び佛租界に居住する者は約各該區内の人口總數の百分の二となり、二〇、六一一人と九、二四六人となつてゐる。全市總計では約九二、一二六人となつて北方人は多くは尙ほ麥食してゐるので、正に全市の中國人の總數から除去せねばならない。又、全市の中國人中、六歳以下の幼兒に就て見れば、一八三、七一三人となつてこれら幼兒の食米も極めて少いので、亦除去せねばならない。この兩項の減除を経て、全市だけの尙ほ食米の中國人は即ち、二、七八八、四一六人となつてゐる。又、該人口統計中、上海市區、共同租界各區に居住する年齢統計表の示す所に據れば、六

歳より十二歳に至る中國兒童は約中國人總數の百分の十五餘を占めて四一八、二二二人となり、十二歳以上の中國人は約百分の八十五を占めて二、三六九、九二四人となつてゐる。而して、十二歳以上の中國人中、男子は約百分の六十を占めて一、四二一、九五四人となり、女子は約百分の四十を占めて九四七、九七〇人となつてゐる。今一般中國人の食量を男子各人毎日の食米を〇・〇〇七五市石と假定すれば、毎年（三百六十五日）の食米二・七四市石となり、女子各人毎日の食米を〇・〇〇五五市石とすれば、毎年の食米は二・〇一市石、六歳より十二歳に至る兒童の各人毎日の食米を〇・〇〇三五市石とすれば、毎年の食米一・二八市石となつて、即ち全市の男子毎年の食米三、八九六、一五四市石、女子毎年の食米一、九〇五、四二〇市石、兒童毎年の食米は五三五、三二四市石となり、三者合算すれば、毎年の總計消費米は即ち六、三三六、八九八市石となる。而して、上海糧食委員會統計は、毎年の消費量を只だの四百餘萬市石（海斛石を以て計算）としてゐるのは聊さか過少の嫌がある。該委員會の消費量統計が大半は各米行の報告に依據してゐるとは云へ、併し米行の記入報告は各々事情を隠蔽してゐるので、正確なる數字を用するに足りない。

(二) 上海荳米業公會北市辦事處の消費量統計

上海食米の消費量は南市には統計がないが、荳米業公會北市辦事處は米行の買賣數量により會費を徴収してゐるので、北市の消費量に對しては時期による記載を持ち、これら記載は民國二十二年以後に至つて始めて比較的完全なものとなつた。該記載に示す所に據れば、北市毎月の消費米は約二三萬市石となり、民國二十二年度の消費

米は三、〇〇三、七六六市石、民國二十三年は二、六九三、八三四市石となつてゐる。事情通の言ふ所に據れば、米行は會費を徴收される爲めに各々事情を少く報じてゐるので、この種の記載は須らく二割を増加して始めて事實と合する。果して然らば、即ち民國二十二年は正に三、六〇四、五一九市石となり、民國二十三年は三、二二二、六〇一市石となる。

南市の消費量は記載がないので、米業者が言ふ所に據れば、南市毎年の消費量の百分の八十を占めてゐると云ひ、これに據つて推算すれば、即ち、民國二十二年は二、八八三、六一五市石となり、民國二十三年は二、五八六、〇八一市石となる。

これに由つて之を觀れば、即ち、南北兩市の民國二十二年の消費總計は六、四八八、一三四市石となり、民國二十三年は五、八一八、六八二市石となつて、筆者の見積の六、三三六、八九八市石と殆んど相異がない。而して、見積が殆んど近い事實は次に見る如く、茲に北市消費量を表にて示せば次の如くである。(第十三表を見よ)

第十三表 上海市消費米統計表 (單位市石)

時 期	民國廿二年	民國廿三年
一 月	二四五、二三〇	七六四、九五〇
二 月	一四三、八八四	二八六、四一八
三 月	二一六、四九〇	二五四、八三一
四 月	二二九、九二五	
五 月	二四一、六〇八	

註

(一)廿二年一月は海斛石が單位となり、茲には市石に換算せり。

(二)廿三年一月の數字は一月三日より二月八日までを包括し、三月の數字は二月十八日より三月までを包括、國曆の新年と舊曆の新年との關係により十餘日の開市の相違がある。茲では該二數の和を以て一二三の三ヶ月の總數に代へた。

六 月	二〇四、七五四	一九八、〇〇〇
七 月	一八九、九五一	一八八、二一八
八 月	二三二、六七二	一七二、四八八
九 月	二六三、七六六	一七〇、七七〇
十 月	二八二、一〇〇	二四〇、六四〇
十 一 月	三五五、四〇九	二〇八、〇一二
十 二 月	三九七、九七七	二〇九、五〇七
全 年 共 計	三、〇〇三、七六六	二、六九三、八三四

(三) 上海食米輸入推算に據る消費量

上海食米の消費量見積には尙ほ一つの推算の方法があつて、今年の輸入數と昨年度のストック數の和を以て、今年の輸出數とストック數の和を減じた兩者の差が、即ち今年の食米の消費量となる。只だ上海の食米の年ストック數は記載がないので一時の調査に従ふことが出来ないが、今先づ毎年のストック數を大體相等しきものと假定すれば、こゝに輸入と輸出の差が即ち、今年の消費量(内河輸出は未だ統計がないが、但し、上海周邊よりの輸入も亦記録がなく兩者は低いものと假定することが出来る)となる。民國二十一年の輸入を六、〇五一、二二八市石、輸出

を三九七、九七九市石と見れば、一年間の消費量は殆んど五、六五三、二四九市石となり、推算の六百三十餘萬市石と比較すれば、既にその差は短少のものである。而して、二十二年はその數更に少く、輸入六、〇二八、八九〇市石となり、輸出は畢竟二、二三九、七八四市石に達して兩者の差は只だ三、七八九、一〇六市石となる。二十三年は統計不全完の爲め推算の方法がない。

上海本地の産米を見れば、その數は又頗る見る可きがあり、主計處統計月報『農業專號』（二十一年二月合刊）所載に據れば、上海稻田面積は一二九、〇〇〇畝となつて、即ち平均産量見積は正に二十萬市石前後となつてゐるのが、これその一である。上海米業商店は各々多くは直接産米區から買ひ集めて上海へ運び、上海に到着した時には再び取次販賣商の手を経る必要がないから記載に由ることがなく、米業に熟知してゐる者の言に據れば、米商の自ら運輸するものゝ數は頗る多く毎年少くとも數十萬市石以上に達してゐると云はれるのが、これその二である。上海の居民は内地の小作米徴收等の事情から往々又直接に米を上海へ搬入して自家の消費に供してゐるが、これらの米に至つては更に記載の考ふべきがない。これその三である。凡そ、これらのものは何れも計算に入れてないが故に、二十一年の上海食米の供給は明らかに必す五、六五三、二四九市石に止まらず、二十二年の供給も亦三、七八九、一〇六市石に止まらない。略々推算すれば、二十一年は正に六百萬より七百萬市石の間にあり、二十二年が四百萬より五百萬市石の間にあることを思へば、即ち兩年の平均は正に六百萬市石前後となつて、筆者の見積數字と又頗る相近きものとなる。

第五章 上海の米價統計

上海は我が國經濟の中心となり、長江の咽喉を扼して中外交通の樞紐を掌握してゐる事より、實に米穀の重要な消費市場及び集散市場となり、産地の米價は時にもとより上海の米價に影響し、而して上海の米價も時には又、産地の米價を左右してゐるが故に、上海米價の研究は實に興味ある問題である。本章に於ては次の四節に分つて叙述することとする。即ち、

- (一) 民國元年以來の上海米價の變動趨勢。該節の資料は上海市政府社會局の統計に取材した。
- (二) 最近米價の變動趨勢。茲では自ら収集した統計に據つた。
- (三) 外省米價格の變動趨勢。國定稅則委員會の統計に據つた。
- (四) 洋米價格の變動趨勢。これ又、國定稅則委員會の統計に據つた。

(一) 民國元年以降上海米價の變動趨勢

上海社會局の米價統計は前清に起つて最近にまで至つてゐるが、茲ではその民國元年以降の數字を取つてそれが趨勢を觀すれば、次のグラフに示すが如くである。（第十四、十五、十六各表及び第一圖を見よ）

社會局の統計は米を粳米、糯米、秈米の三種に分つてゐる。粳米は粘りけが糯米と較べて劣り、而かも秈米より

は強く、最も飯食に適してゐるので販路が最も廣く、その價格の變動は糯米、秈米の價格の前後にある。試みに次の圖表を以て三者の變動趨勢を觀れば、大體初めに於ては一致してゐるので、粳米は上海米價の變動趨勢の代表と見做すことが出来る。

民國元年以來の上海米價の變動は大體次の若干の時期に分つことが出来る。

(一) 民國元年より民國八年に至る。この時期に於ける上海米價の騰落は大きくなく、最低が五元餘にして、最高が又十元に及ばない。

(二) 民國九年より民國十四年に至る。この時期の上海米價の水準は前と較べれば略々高く、騰落も亦前に較べて甚だしく最低が八元以下にあつて、最高は十三元を越してゐる。

(三) 民國十五年より民國二十年に至る。この時期の上海米價の騰落は極めて大きく、粳米の十五年の最高は殆んど十八元に達し、十七年は降下して十元に至り、十九年は又再び上昇して二十元の最高記録に達してゐる。

(四) 一年以後を見るに、一年以後は上海米價の動きは下落の趨勢となつて、二十年の粳米の最高は尙ほ十六元にあつて、二十三年の最低記録は僅かに八元有餘となり、その間の下落は殆んど一倍に及んでゐる。

以上の各期の米價騰落の原因を具さに考察するに、昔は大概何れも收穫の豐凶に原因したが、最近數年は即ち洋米の輸入が又有力な原因となつてゐる。民國元年より民國三年の上期に至つては、上海米價の下落は民國元年、民國二年の米穀の豐收に原因したが、民國三年の下期より民國四年に至つての上海米價の騰貴は民國三年の江蘇省の大水及び民國四年の安徽、江西、湖南、湖北四省の大水に原因した。民國五年より民國八年に至つては大抵多くは

豐收であつたので上海米價は又復下降した。民國九年は河北、山東、河南、山西、陝西五省の大旱魃は農産の減收となり、上海米價は即ち減收により固定した。民國十年の長江の大水は又減收を告げたので、上海の米價は尙ほバランスを維持した。その後、十一、十二兩年は比較的豐收だつたので米價は稍々安定した様だつたが、十三年は直ちに湖北、湖南、江西の洪水が災して上海の米價は影響を受け、十四年の長江の水災、十五年の江蘇、浙江の旱災は米價に影響して直ちに動搖を示して上昇し、十五年は十八元に達した。十六、十七兩年は米穀が豐收だつたので米價は又復下降し、以て十七年に至つては十元餘の低價となつた。十八年は蝗災に災ひされて又減收を告げたので米價は再度高漲し、十九年には二十元の最高記録に達した。十九年の秋期收穫は甚だ豐富だつたので、秋期以後は即ち回復を見た。二十年の淮河流域の空前の水災は江蘇、安徽、湖南、湖北の災害が極めて甚だしかつたので、上海米價は又一層上昇した。

二十一年以後は米穀の豐收及び外米の擁集を兼ねて上海の米價の下落は極めて劇烈であつた。二十三年に至つて始めて各地が旱魃を告げたので上海米價は再び上昇の趨勢を呈した。(註一)

以上述べた所によつて上海米價の解釋の重要な轉變の關鍵とするに足るが、併し、吾人が若し徹底的に上海米價の變動趨勢を認識せんと欲すれば、就中その長期趨勢及び季節變動に就て一言せざるを得ない。

上海市政府社會局の研究に據つて(註二)、上海米價の長期間を論ずれば、高騰繼續の趨勢にある。この説の證する二十年以前は洵に誣ひる譯ではないが、試みに左圖を觀れば、民國元年以來、米價は收穫の増減によつて上下してゐるが、併し、大體から言へば益々高勢にあるのではなからうか？ 併し、民國二十年以後は、この種長期の趨

勢は既に方向を轉變して漸以下降の趨勢にある。米價の長期趨勢の轉變は、適々一般物價と符合して二十年以前の米價の騰貴繼續が當に貨幣購買力の低下を反映するだけでなく、而かも、二十年以後の米價の急據なる下落も亦當に貨幣購買力の上昇を反映するものだけでないことを知る可きである。(註3)

左圖を觀れば、上海米價の季節變動は實に顯著であつて、上海社會局の研究に據れば(註4)、大體、秋期收穫以後(十、十一、十二各月)、米價は逐次低下して春期に漸く上昇に向ひ(一月より六月に至る)、就中、端境期(七、八、九各月)には價格は最も上昇し、新米が上海市へ現れると米價は又下落する。

(註1) 本節に述べる所の豊收或は減收の事實は、社會經濟月報第一卷第六期、姚慶三「試編中國經濟年記說明」を見よ。

(註2) 社會月刊第一卷第二號參照。

(註3) 社會經濟月報第一卷第二期、顧季高、姚慶三「今日之銀價問題」參照。

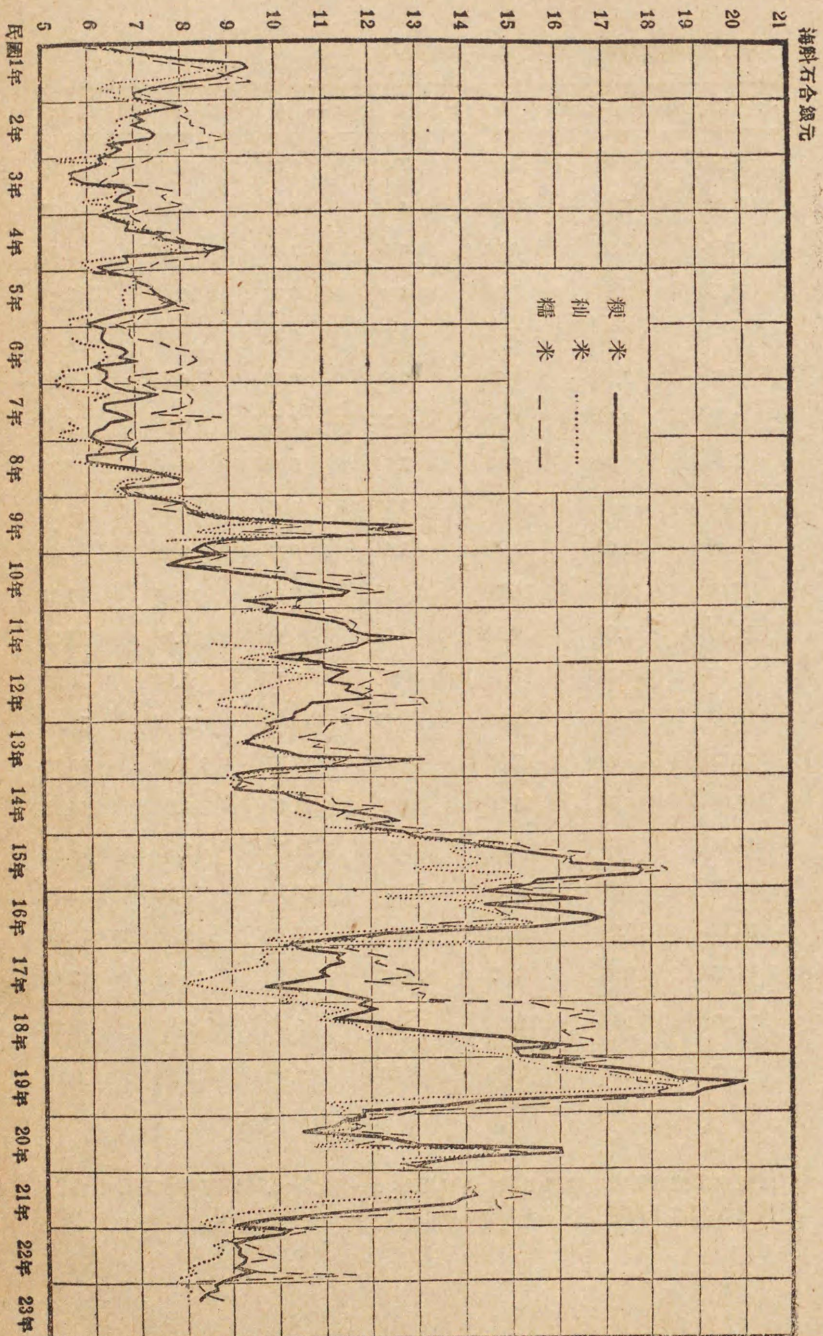
(註4) 社會月刊第一卷第二號參照。

(一) 最近米價の變動趨勢

民國二十年以降、上海米價は急遽に下落し尙ほ逐次衰下を示して之を防遏することが出来なかつた。その最低記録が現れたのは、粳米は二十三年の三月に於て、當時各市石の最低價格は僅かに七・七五元、糯米、秈米は何れも二十二年十二月にあつては、當時各市石の最低價格は糯米は僅かに七・〇五元、秈米は僅かに六四・二元に過ぎなかつた。(第十七、十八、十九各表及び第二、三、四各圖を見よ)

糯米、秈米は二十二年十二月に既に最低記録を超過したが、併しその穩健な騰勢は即ち尙ほ二十三年四五月の粳

第一圖 民國元年以來の上海米價の變動趨勢



第十四表 民國元年以降の粳米

年 別	月 別	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
民國元 年	1912	6.53	6.84	7.47	8.04	9.34	9.47
二 年	1913	7.54	8.04	7.46	7.09	7.24	7.01
三 年	1914	6.30	6.35	6.03	5.66	5.74	5.93
四 年	1915	6.35	6.63	6.92	6.87	7.55	7.64
五 年	1916	6.52	7.06	7.10	7.32	7.41	7.56
六 年	1917	6.40	6.35	6.33	6.41	6.74	6.87
七 年	1918	6.51	6.83	7.53	7.06	6.37	6.36
八 年	1919	6.31	6.85	7.04	5.99	6.00	6.64
九 年	1920	7.57	8.05	8.11	8.32	8.87	10.62
十 年	1921	8.90	8.04	7.78	8.75	9.46	10.25
十一年	1922	9.81	10.50	11.17	11.50	11.59	11.81
十二年	1923	11.01	11.55	11.34	11.17	11.68	11.52
十三年	1924	9.87	9.93	9.72	9.51	9.37	9.73
十四年	1925	9.26	9.21	9.09	10.17	10.51	10.85
十五年	1926	12.94	13.66	15.18	14.94	15.65	16.29
十六年	1927	14.52	15.79	16.63	14.56	15.93	16.60
十七年	1928	10.58	11.44	11.30	11.43	11.09	10.94
十八年	1929	11.81	12.15	11.78	11.34	12.32	12.53
十九年	1930	16.59	16.00	17.38	18.21	18.54	20.05
二十年	1931	11.87	11.38	11.25	10.63	12.15	12.66
廿一年	1932*	—	—	—	—	14.16	14.74
廿二年	1933	10.28	10.08	9.42	9.06	9.14	9.12
廿三年	1934	8.61	8.65	8.39	8.37		

註：本表は上海市政府社會局糧食統計に據りたるも、廿二年二月以後海斛石を銀元に換算し、一律に比較せり。 *廿一年一月より

月別平均價格表 單位元(各海斛石)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一月	十二月	平 均
9.19	8.88	8.00	7.43	7.02	7.02	7.94
7.36	7.49	7.39	6.52	6.75	6.59	7.21
6.93	7.03	6.76	6.62	7.09	6.63	6.42
8.23	8.97	8.64	6.84	6.90	6.28	7.40
7.74	7.92	7.52	6.82	6.39	6.09	7.12
6.72	7.08	6.20	6.42	6.42	6.35	6.52
6.70	6.95	6.49	6.38	6.15	6.08	6.62
7.24	7.64	8.03	7.94	6.71	6.86	6.94
12.95	12.11	13.01	9.02	8.47	8.27	9.61
10.44	11.07	11.58	11.44	9.48	9.99	9.68
13.00	12.00	11.75	11.01	9.98	11.01	11.25
11.87	12.05	10.74	10.65	10.40	10.38	11.20
10.24	10.54	13.14	11.95	9.77	9.14	10.29
11.07	11.72	12.35	12.66	11.82	12.67	10.95
16.31	17.74	17.85	17.72	15.57	15.41	15.77
16.98	16.66	15.70	12.37	11.39	10.34	14.77
11.11	10.51	9.91	11.11	11.59	12.02	11.17
13.53	14.95	15.13	16.28	15.10	15.19	13.51
19.61	19.11	18.91	14.45	13.56	11.84	17.02
13.03	16.03	16.07	14.07	13.27	12.93	12.95
13.90	13.70	12.32	10.92	9.69	9.10	12.32
9.28	9.22	9.07	9.50	9.10	8.80	9.34

は原來單位は每市石の銀元數なるも茲には一市石=0.8545海斛石として各四月までは上海戦争に因り市無し。

第十五表 民國元年以降の糯米

年 別	月 別	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
民國元年	1912	5.94	6.80	7.35	7.37	7.95	8.53
二 年	1913	7.50	8.11	8.19	8.00	8.24	8.23
三 年	1914	7.40	7.18	6.64	6.69	6.45	6.30
四 年	1915	6.91	7.05	7.28	7.18	7.81	7.97
五 年	1916	6.12	7.18	7.05	7.05	7.07	7.48
六 年	1917	6.91	6.90	6.97	7.55	7.79	8.19
七 年	1918	7.26	7.45	8.13	8.26	8.23	7.95
八 年	1919	7.07	6.93	6.98	6.68	6.71	6.63
九 年	1920	7.39	8.00	7.36	8.10	8.49	9.53
十 年	1921	8.96	8.60	8.06	9.24	10.42	11.93
十一年	1922	10.60	11.11	11.55	11.72	11.68	11.56
十二年	1923	11.35	12.66	12.25	12.00	11.75	12.06
十三年	1924	11.18	11.06	10.99	10.42	11.02	10.76
十四年	1925	9.15	9.51	9.05	10.10	11.17	11.26
十五年	1926	12.84	13.94	15.09	15.43	16.60	16.25
十六年	1927	15.48	15.36	15.44	14.67	14.67	14.83
十七年	1928	11.43	11.94	12.35	12.08	12.35	12.83
十八年	1929	15.43	15.85	16.77	16.21	16.82	16.79
十九年	1930	17.40	16.50	16.45	17.23	17.68	17.68
二十年	1931	12.33	11.49	11.85	11.53	12.75	12.20
廿一年	1932*	—	—	—	—	14.89	15.39
廿二年	1933	10.77	10.20	8.72	9.23	9.54	9.50
廿三年	1934	8.22	8.65	8.44	8.78		

註：本表は上海市政府社會局糧食統計に據りたるも、廿二年二月以後海斛石を銀元に換算し、一律に比較せり。 *廿一年一月より四月

米月別平均價格表 單位元(各海斛石)

七 月	八 月	九 月	十 月	十一年	十二月	平 均
8.81	9.25	9.54	7.85	7.11	7.41	7.83
8.55	8.55	8.98	7.47	7.72	7.55	8.09
7.32	7.87	7.61	7.71	8.05	7.33	7.21
8.21	8.50	8.65	8.53	7.56	7.36	7.75
7.56	7.80	8.20	7.20	7.10	6.60	7.20
8.25	8.35	8.14	7.90	6.90	6.88	7.56
7.33	8.75	7.87	6.94	6.85	6.86	7.66
7.35	7.36	7.29	6.79	6.83	7.09	6.98
10.58	9.29	11.40	9.31	8.48	8.69	8.92
11.01	11.61	12.32	10.60	10.45	10.43	10.22
11.77	11.64	11.19	10.73	10.49	10.86	11.24
11.87	13.15	13.24	11.62	11.38	12.09	12.12
11.76	11.58	11.48	11.05	11.05	9.65	11.00
12.27	11.49	11.28	13.20	12.35	13.49	11.19
16.13	18.22	18.37	17.00	16.60	14.75	15.93
15.15	13.05	14.72	12.32	11.68	10.11	14.02
12.93	11.86	13.23	12.85	13.14	13.07	12.51
16.07	16.26	16.74	16.62	15.59	15.44	16.22
18.53	18.13	18.21	16.65	14.88	12.93	16.86
11.61	14.12	15.31	13.84	12.60	13.27	12.74
14.65	14.65	14.76	12.50	9.75	9.16	13.22
9.91	9.22	9.09	9.26	11.61	8.18	9.61

は原來單位は每市石の銀元數なるも茲には一市石=0.8545海斛石として各までは上海戦争に因り市無し。

第十六表 民國元年以降の

月 別	年 別	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月
民國元 年	1912	6.33	6.55	7.45	8.07	8.95	8.92
二 年	1913	7.17	7.50	7.27	6.93	6.66	6.71
三 年	1914	5.37	6.42	5.99	5.64	5.64	5.68
四 年	1915	6.44	6.77	7.00	7.10	7.68	7.44
五 年	1916	6.21	7.00	7.00	7.00	6.88	6.77
六 年	1917	...	...	5.68	5.85	6.34	6.35
七 年	1918	5.48	5.79	6.45	6.14	...	...
八 年	1919	6.17	6.32	6.22	...	5.70	6.19
九 年	1920	7.96	8.15	8.38	8.30	8.93	10.22
十 年	1921	...	...	...	...	8.50	...
十一年	1922	9.28	...	...	10.80	...	11.05
十二年	1923	10.49	10.20	10.92	10.20	9.83	9.49
十三年	1924	9.79	10.00	9.97	9.61	9.13	9.82
十四年	1925	9.06	9.00	9.08	10.59	10.49	...
十五年	1926	12.39	13.22	14.96	13.71	13.91	14.33
十六年	1927	14.60	12.20	14.39	13.91	14.42	14.74
十七年	1928	9.67	9.78	9.63	9.77	9.44	8.81
十八年	1929	10.89	11.50	11.09	10.91	11.58	11.81
十九年	1930	15.17	15.58	15.77	18.13	17.57	18.72
二十年	1931	11.44	11.43	11.84	11.06	11.14	11.51
廿一年	1932*	—	—	—	—	12.83	12.99
廿二年	1933	9.62	9.62	8.84	8.59	8.75	8.71
廿三年	1934	7.79	8.06	8.00	8.00		

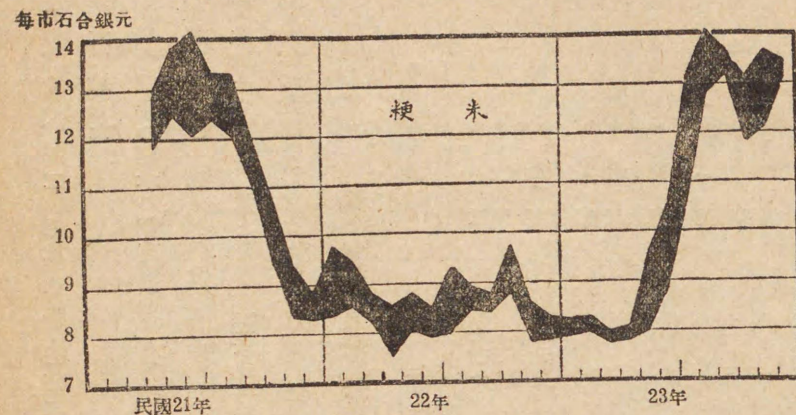
註：本表は上海市政府社會局糧食統計に據りたるも、廿二年二月以後海斛石を銀元に換算し、一律に比較せり。 *廿一年一月より四月

秈米月別平均價格表 單位元(各海斛石)

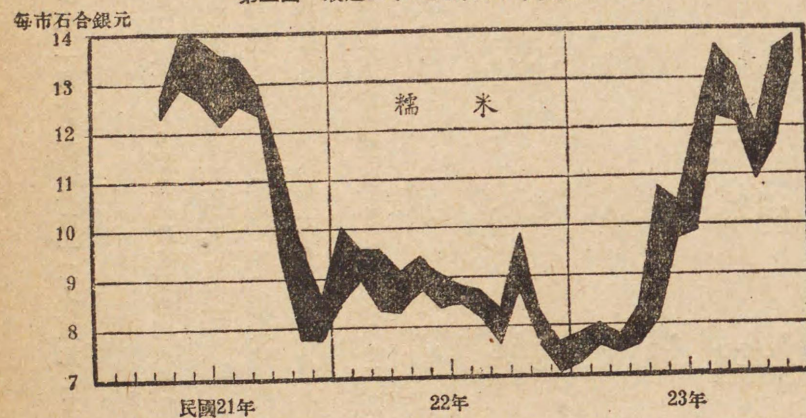
七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	平 均
8.30	7.89	6.52	6.25	6.60	6.63	7.37
6.62	6.66	6.49	6.79	6.44	6.41	6.80
6.61	6.61	6.54	5.92	6.47	6.36	6.10
7.97	7.67	8.03	6.68	5.90	6.01	7.07
6.78	6.79	...	6.08	5.60	5.63	6.52
6.40	6.30	6.18	5.45	5.48	5.30	5.93
...	...	5.60	5.78	5.40	5.39	5.75
7.00	7.94	6.32	6.66	6.56	6.68	6.57
8.95	8.35	9.82	7.68	...	...	8.68
8.63	...	9.90	9.55	...	10.50	9.42
...	8.63	9.91	9.97	9.23	9.94	9.85
9.43	8.74	8.73	9.69	9.91	9.71	9.78
9.98	10.56	11.48	11.45	10.13	8.94	10.07
...	10.40	10.70	...	11.05	12.38	10.31
14.29	12.91	15.04	15.23	14.48	14.30	13.97
15.01	15.44	12.26	10.41	9.79	14.40	13.51
8.53	7.98	8.46	9.30	10.37	10.09	9.32
12.01	13.72	13.89	14.25	14.09	14.90	12.55
18.53	16.70	13.06	11.03	11.47	11.32	15.25
10.76	14.58	14.67	12.65	12.73	12.68	12.21
10.70	10.78	9.26	8.64	8.28	8.57	10.38
8.55	8.24	8.04	8.16	7.85	7.79	8.57

は原來單位は毎市石の銀元數なるも茲には1市石=0.8545海斛石として各
までは上海戦争に因り市無し。 ...は市價不全。

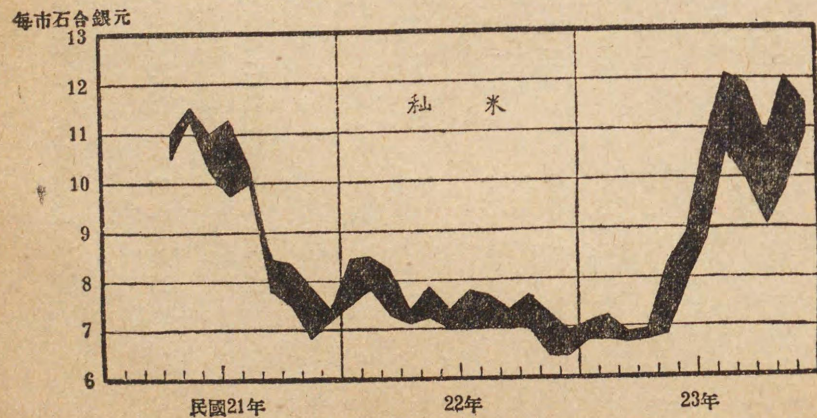
第二圖 最近三年の上海粳米市價變動の趨勢



第三圖 最近三年の上海糯米市價變動の趨勢



第四圖 最近三年の上海秈米市價變動の趨勢



米の價格が漸次上昇に向つた後にあつた。當時、各種の米價の回復は政府が二十二年十二月より洋米の進口税を徵收したことに由り、洋米が自由に輸入出來ずして上海のストックが稀薄となつて來たからである。これらの回復の趨勢は六月以後の旱災によつて益々強固となり、粳米の價格は六月には既に十元以上の高價を越し、七、八の兩月には旱災の狀況が益々明らかとなつて來たので即ち、六月の最高價格一〇・六〇元より七月の最高價格の一三・一五元に上昇した。八九月には騰勢は益々熾んとなつて、大體、何れも十三元以上となつて八月の最高價格は一四・一〇元に達し、九月の最高價格は一三・七〇元に達した。十月には江蘇、浙江各地の新米が上海市場へ陸續として搬入されたので、價格は再び下落の趨勢となつて大體、約十一・二元の間となり、十一、十二兩月は各地の食糧不足によつて、米穀の上海搬入が日々減少を見、而して各地では上海に於ける救恤米の多量を採辦したので上海の米價は又堅固となつて、大體、約十三元前後となり、十一月は最高價格一三・七〇元に達し、十二月は最高價格一三・四五元に達した。

糯米、秈米の趨勢も亦粳米と相同じく、糯米の價格は五六月の間に既に十元以上を越し、七月は最高價格一二・二五元に達し、八月は最高價格一三・七〇元に達し、九月は最高價格一三・二〇元に達した。十月も亦新米の登場によつて稍々元へ歸つて、大體、約十一・二元の間となつた。十一、十二兩月は又復、上昇の趨勢となつて十一月は最高價格一三・六五元に達し、十二月は最高價格一三・九〇元に達した。

秈米は五六月の間に既に八元を越し、七月は最高價格一〇・八〇元に達し、八月は最高價格一二・一〇元に達し、九月は最高價格一一・九〇元に達した。十月も亦新米の出現によつて稍々降坂となり、大體、約九元乃至十元の間と

なり、十一、十二兩月は又復、上昇に向つて十一月の最高價格は一二・〇五元となり、十二月の最高價格は一一・五〇元に達した。

二十三年の粳米の最高價格は八月の一四・一〇元となり糯米の最高價格は八月の一三・七〇元となり、籼米の最高價格は八月の一・一〇元となつた。本項の市價は何れも市石を以て計算し、今若し海斛石に換算すれば、即ち、粳米は一六・五〇元となり、糯米は一六・〇三元となり、籼米は一四・一六元となる。試みにこの價格と十五年及び十九年の最高價格とを比較すれば、即ち次表の如くなる。(第二十表を見よ)

第十七表 最近三年の上海粳米の市價表 (1) (單位元各市石) (2)

時 期		廿一年 (3)		廿二年		廿三年	
月 別	週 期	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
一 月	第 一 週	三・三六	三・三六	九・八八	九・八八	八・八五	八・八五
二 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・九〇	八・九〇	八・八五	八・八五
三 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
四 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
五 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
六 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
七 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
八 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
九 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十一 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十二 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五

時 期		廿一年 (3)		廿二年		廿三年	
月 別	週 期	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
一 月	第 一 週	三・三六	三・三六	九・八八	九・八八	八・八五	八・八五
二 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・九〇	八・九〇	八・八五	八・八五
三 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
四 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
五 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
六 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
七 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
八 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
九 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十一 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五
十二 月	第 一 週	三・三六	三・三六	八・八五	八・八五	八・八五	八・八五

[illegible]

(4)

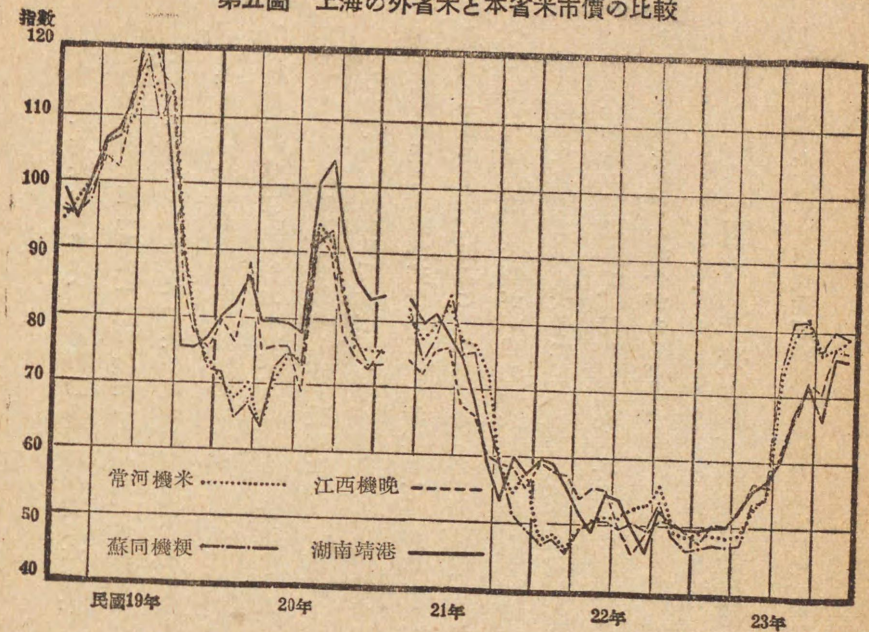
[illegible]

(1) 本表は社會經濟月報第一卷第二期に據つて改編す。
(2) 原表の二十二年二月以前は海鮓石が單位なるも、茲には一市石〓〇・八五四五海鮓石とし、一律に各市石として銀元數に換算して比較した。
(3) 二十二年二月、三月は上海戰爭に由つて停市す。
(4) 歷年の關を廢止して停市す。
▲毎月の最高價格及び最低價格。

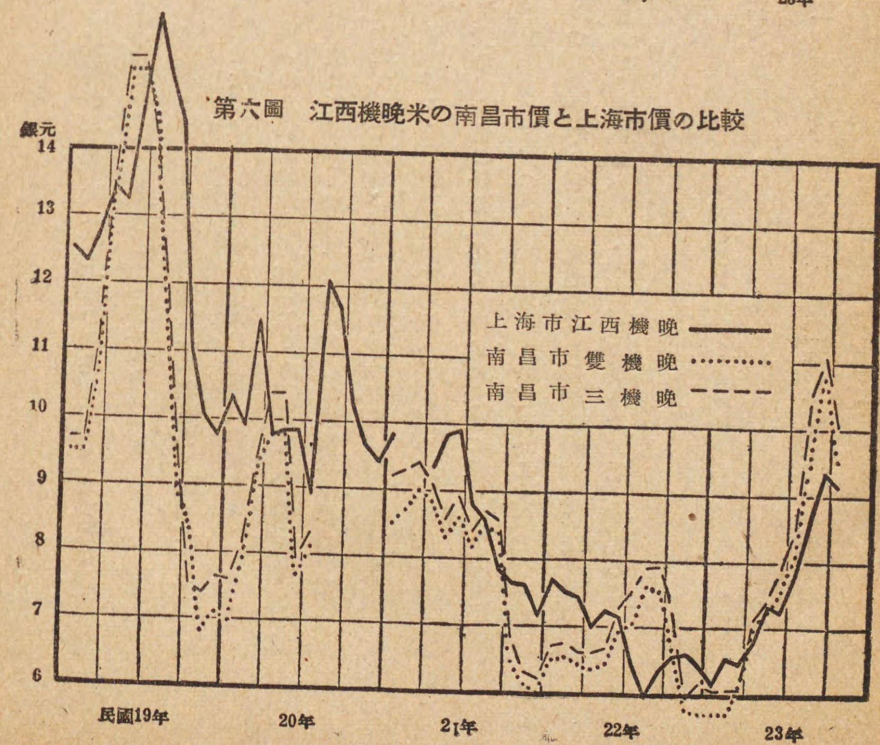
第十九表 最近三年の上海秈米市價表 (1) 單位元 (各市石) (2)

[illegible]

第五圖 上海の外省米と本省米市價の比較



第六圖 江西機晚米の南昌市價と上海市價の比較



種類に分つてゐる。茲にその八年以降の市價を列舉すれば次の如くなる。(第二十五表及び第七圖を見よ)

第二十三表 南昌三機晚米市價表 單位元(各石)

十八年	十九年	二十年	廿一年	廿二年	廿三年
七・五六	九・七〇	七・六〇	九・二〇	六・七〇	六・〇五
七・六〇	九・七〇	八・一四	九・三〇	六・七五	六・〇七
七・七八	一一・一一	九・四一	九・四〇	六・六一	六・七一
七・八〇	一三・五〇	一〇・四〇	九・一〇	六・六〇	七・一三
七・九〇	一五・四〇	一〇・四〇	八・五八	六・六八	七・四〇
七・八〇	一五・四〇	七・九四	八・九三	七・二九	七・九〇
七・六三	一四・四二	八・三二	八・四〇	七・五五	八・五〇
八・四三	一二・一五		八・七〇	七・九〇	一〇・五一
	九・五八		八・五八	七・九二	一一・〇九
	七・五一		六・八二	七・二一	一〇・〇五
	七・四〇		六・三〇	五・九四	
	七・六三		六・二〇	六・一五	

第二十四表 南昌雙機晚米市價表 單位元(各石)

十八年	十九年	二十年	廿一年	廿二年	廿三年
七・三七	九・五〇	七・〇〇	八・五〇	六・五〇	五・七〇
七・四〇	九・五〇	七・九一	八・七〇	六・五四	五・七〇

江西省政府統計室統計に據る。

三	月	七・五八	一〇・六八	九・三〇	九・〇〇	六・四三	六・一〇
四	月	七・六〇	一三・三二	九・八〇	八・八五	六・三六	六・九八
五	月	七・七〇	一五・二〇	九・八〇	八・三〇	六・四四	七・二〇
六	月	七・六〇	一五・二〇	七・七一	八・六〇	六・九二	七・五九
七	月	七・四三	一四・五四	八・一二	八・一八	七・〇八	八・一〇
八	月	七・九四	一一・七〇	：	八・五〇	七・六二	九・四五
九	月	：	九・〇〇	：	八・三八	七・五六	一〇・七七
十	月	：	八・三八	：	六・四八	六・六八	九・五三
十一	月	：	六・八〇	：	六・一二	五・七八	：
十二	月	：	七・一〇	：	六・〇〇	五・七〇	：

江西省政府統計室統計に據る。

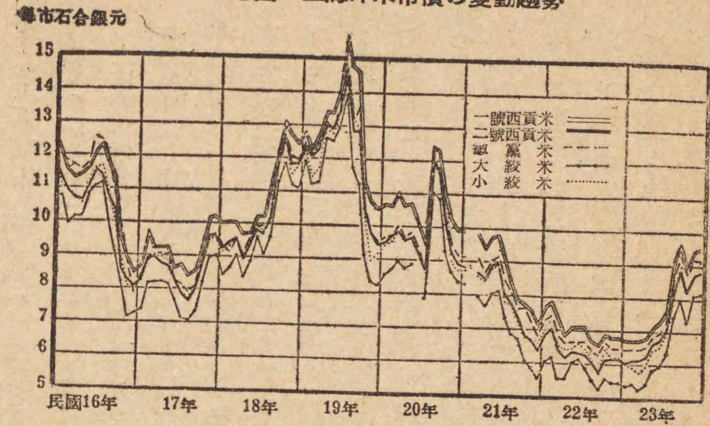
上海洋米價格の趨勢は大體に於て亦、國米（支那本國米）と相同じである。民國十五年には皆て一度上昇して、西貢一號米の最高價格が各市價一二・七〇元に達し、小絞米が一二・九二五元に達したことがある。民國十六、十七、兩年には漸次低落を示して十七年には西貢一號米が最低僅かに八・四三四元、小絞米が僅かに七・七〇二元となつた。十八年に始めて再び上昇に向ひ、十九年に至つて最高記録に達し、西貢一號米の最高價格が一五・七九六元、小絞米が一四・六六八元に達した。民國二十年以後又下降して、西貢一號米の民國二十年の最低價格は九・六二三元となり、二十一年に至つては七・二二一元に下落し、二十二年には六・六〇一元に下落した。小絞米の民國二十年の最低價格は八・七一元となり、二十一年に至つては六・六〇四元に下落し、二十二年には五・七三八元に下落した。

二十三年の四、五月後に至つては、各種洋米の市價は始めて本國米の上昇により高騰に趨き、年末に至つては、西貢一號米は既に九・五六二元に達し、小絞米は九・一四三元に達し、十五年の最高價格と較べれば、固より尙ほ及ばざるものがあるが、併し二十年に開始された激落の當時の市價と比較すれば既に相接近したものがある。

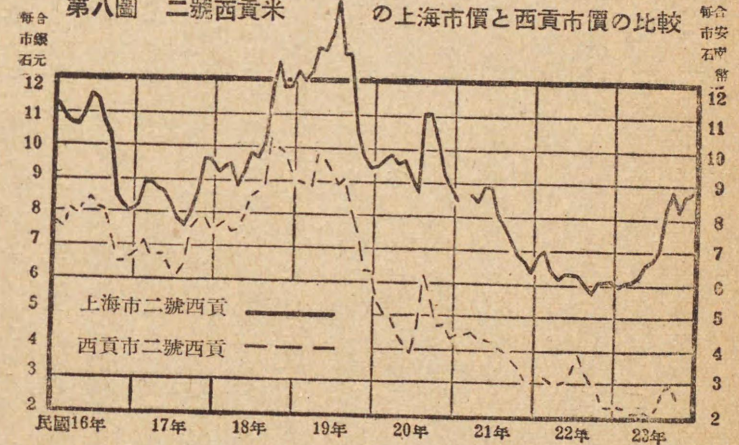
上海の洋米價格の趨勢は固より國米と異るところがないが、但し洋米の產地價格は果して上海消費地の價格とその趨勢は同じきものであらうか？ これ又、極めて興味ある問題なのである。羅馬國際農會所編の『國際農業統計年鑑』及び『收成報告と農產統計月刊』は國外の米價格に對して精確なる調査を行つてゐるが、茲では西貢市場の西貢二號米及び仰光市場の緬甸二號米を取つて、その民國九年以後の市價を第二十六及び二十八表に列記した。前者は上海の西貢二號米と比較することが出來、後者は上海の小絞米と比較することが出来る。併し、比較の前に先づ必ず計量單位及び貨幣單位とを一致して置かねばならぬ。西貢市場の西貢二號米は元來、各公擔（Quater）を安南貨幣を以て表示してゐるが、茲では特に各市石として安南貨幣に換算し（第二十七表を見よ）計量單位をして一致せしめた。貨幣單位に至つては、即ち、安南貨幣の上海歷年の爲替價格か一時容易く求め得られなかつたので、姑く尙ほそのまゝにした。仰光市場の緬甸二號米は以來七千五百ポンドを以てルピー數に表示してゐるので、茲には特に各市石として國幣數に換算した。（第二十九表を見よ）

今以後の西貢市の西貢二號米と上海の西貢二號米とを折合して同一圖に示せば第八圖の如し。再び以後の仰光の緬甸二號米と上海の小絞米とを折合して同一圖に示せば第九圖の如し。この二圖を見れば、洋米の上海市價の趨勢は完全にその産地の市價と相同じく、畢竟、上海の市價は國外の市價の支配を受けるが、抑々國外の市價は上海の

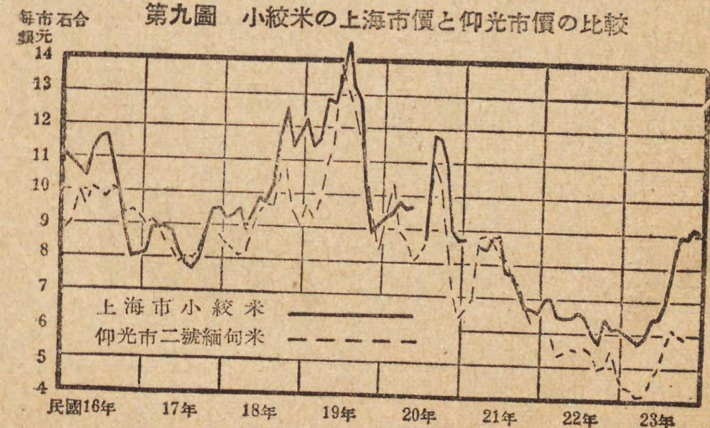
第七圖 上海洋米市價の變動趨勢



第八圖 二號西貢米の上海市價と西貢市價の比較



第九圖 小紋米の上海市價と仰光市價の比較



市價の影響を受け、その爲め二者の變動趨勢は前後を分ち難く、又容易く言はる可きものでないことを知るべきである。

これを要するに、上海の洋米價格は時に或は國外産地の收穫の増減の影響を受けることがあるが、併し、中國は過剰の洋米が排出される最後の場所であるから、國外産地の市價は時には反つて上海消費地の市價の支配を受けることも亦頗る可能性あることである。

第二十五表 上海の洋米市價表 (1) 單位元(各市石)(2)

年 月	西貢米一號	西貢米二號	敏 黨 米	大 紋 米	小 紋 米
民國十五年	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
一 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
二 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
三 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
四 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
五 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
六 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
七 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
八 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
九 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
十 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
十一 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041
十二 月	11.041	11.111	11.042	10.041	10.041

十二月
民國十六年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

三·六〇
二·五八
二·一八
二·一五
二·一四
二·一三
二·一三
二·一三
二·一三
二·一三
二·一三
二·一三

一·九〇
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一
一〇·〇一

二·七八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八
二·〇八

一〇·九五
九·六五
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六
一〇·七六

一·九四
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三

民國十七年

一 二 三 四 五 六
月 月 月 月 月 月

九·三三
八·五八
八·五八
八·五八
八·五八
八·五八

八·六二
八·六二
八·六二
八·六二
八·六二
八·六二

八·五五
八·五五
八·五五
八·五五
八·五五
八·五五

七·九〇
七·九〇
七·九〇
七·九〇
七·九〇
七·九〇

八·四〇
八·四〇
八·四〇
八·四〇
八·四〇
八·四〇

民國十八年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三
一〇·九三

一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八
一〇·五八

一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一
一〇·四一

九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九
九·七九

一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三
一〇·三三

民國十九年

一
月

二·八六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六
三·〇六

三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三
三·三三

三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四
三·四四

二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五
二·七五

二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四
二·九四

一一、四七六
一二、七四七
一三、九〇七
一四、七六六
一五、四六三
一六、六六八
一七、二四七
一八、二六三
一九、三三三
二〇、三三三
二一、八二二
二二、一八〇
二三、九七三
二四、四四四
二五、五四五
二六、八〇〇
二七、六四四
二八、六八五
——
二九、七四四
三〇、四三三
三一、七三三

二・四五
九・〇九
八・七六
七・八五
八・七九
八・五九七
八・四五二
八・八一七
八・九〇七
七・八六
七・七四七
七・二六五
六・七四六
六・九〇一
六・六〇四
六・四三三
七・〇〇七
七・〇九〇
六・五八六
六・四三〇

第二十七表 西貢市の西貢二號米月別市價表 單位安南貨幣(各市石)

月別	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	全年平均
別	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四					
一	七・六九	七・八七	七・八九	九・〇五	五・九八	四・四六	三・九八	二・三七					
二	七・五八	七・二二	七・四九	八・九四	五・〇一	四・四五	三・九八	二・三七					
三	八・一〇	六・七九	七・四六	八・八六	四・九〇	四・五五	三・〇八	二・二三					
四	七・九五	六・七九	七・五七	九・三六	四・四七	四・三三	三・〇三	二・二九					
五	八・二六	六・七九	七・九四	九・六四	四・八九	四・三三	三・〇三	二・二九					
六	八・四〇	六・二五	六・五七	八・九〇	三・九三	四・二五	三・五〇	二・五五					
七	八・一七	六・二四	八・五七	八・九四	四・〇二	四・〇六	三・九一	二・七五					
八	八・〇八	六・四八	八・三三	九・一〇	六・〇一	三・九八	三・五五	二・八三					
九	七・三三	七・五〇	一〇・二五	八・一四	五・五三	三・六二	三・〇三	二・八七					
十	六・四九	七・八〇	一〇・〇五	七・四八	四・七三	三・四四	二・七〇	二・七四					
十一	六・四九	七・八七	九・八五	六・三三	四・八九	三・六七	二・三〇	二・七四					
十二	六・六三	七・五五	九・二二	六・三〇	四・六八	三・六二	二・三三	二・七四					
全年平均	七・六六	六・九五	八・六五	八・四四	四・八七	三・九三	二・三三	二・七四					

本表の數字は前表數字により各公擔二・二八二〇五市石として各市石を安南貨幣に換算す。

第二十八表 仰光市の緬甸二號米月別市價表 (單位各七・五〇〇ポンドのルビー數)

月別	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	全年平均
別	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四					
一	四・三	四・三	四・五八	四・三	二・〇	二・三	一・七						
二	四・〇	四・五	四・一	三・四	二・一	二・三	一・九						

羅馬國際農會出版「國際農業統計年鑑」(International Year Book of Agricultural Statistics)及び「收成報告と農業統計月刊」(Monthly Crop Report and Agricultural Statistics)に據る。

第二十九表 仰光市の緬甸二號米月別市價表 單位元(各市石)

月別	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	全年平均
別	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四					
一	八・八六	九・〇三	八・四七	九・七〇	九・五二	六・七五	四・四〇						
二	九・五九	九・五九	八・三三	九・二九	一〇・三〇	六・九五	五・八〇						
三	一〇・〇五	八・九三	八・五七	九・八四	八・九四	八・七五	五・三〇						
四	九・五九	八・五二	八・三三	一〇・八四	八・六八	八・六三	五・四三						
五	一〇・三九	八・七二	八・九二	一二・四〇	八・〇六	八・六八	五・五七						

六	七	八	九	十	十一	十二月	全年平均
月	月	月	月	月	月	月	
10.046	7.519	9.555	3.967	8.271	8.771	5.491	5.013
9.843	8.033	9.206	2.347	8.255	8.157	5.582	5.559
10.139	8.011	9.21	2.577	10.921	7.522	5.400	6.152
9.957	8.102	10.277	1.574	10.455	7.428	4.944	6.015
9.867	8.833	10.754	10.276	8.844	6.699	5.013	5.947
9.433	8.772	9.501	9.39	7.100	6.266	5.537	
9.39	8.772	9.045	8.45	6.402	5.537	4.833	
9.661	8.531	9.238	10.68	8.75	5.537	4.833	

九〇

本表の數字は前表の數字により先づ七、五〇〇ポンド四三・八九市石(市石一七〇・九〇ポンド)として各市石をルビ
 一數に換算す。再び毎月の印幣平均の爲替價格(國定稅則委員會の上海貨價季刊及び上海物價月報に據る)を按じて各
 市石を銀元數に換算す。

第六章 運 賃

上海は特に米の廣汎な消費市場であるばかりでなく、或は又、米の主要なる集散市場であるが故に、吾人は米價
 の外、本省、外省乃至外洋の米の運賃に對しても亦、これを検討しなければならない。

(一) 江蘇、浙江各地と上海間の運賃

江蘇、浙江各地と上海間の運賃は彼我同じでなく、即ち、同一地域に於ても又、運輸方法が異つてゐるので、習
 慣用法に従ひ南北兩路に分つて之を述べてみよう。北路には蘇州、無錫、常熟、南京等がある。蘇州から米を上海
 へ運ぶのは汽車の運賃が比較的安く、每石(海斛石、以下同様)約一角六分(十六錢)で、帆船、汽船の運賃は則
 ち二角(二十錢)となり、運輸の時間を計算しても又、汽車が最も速くて只だの四時間で到着し、而して、汽船は
 二十時間、帆船は更に數日を要するのである。

併し、帆船による米の運送は米市場の各地のものも一船に満載することが出来、上海到着後も三月餘を経過して
 も費用を取られず、貯賃、倉敷料が何れも節約出来るので、今日では帆船による運送は尙ほ重要な地位にある。
 無錫を以て言へば、各種の運賃は何れも蘇州と較べて略々高いが、殊に帆船が最も高く每石二角二分半(二十二錢
 五厘)汽船、汽車は則ち、每石一角九分(十九錢)前後で、所要時間も又、帆船よりは遙るかに尠ない。常熟から

の米の運賃は汽船は帆船よりも高く、每石二角三分半(二十三錢五厘)、帆船は只だの二角(二十錢)であるが、併し、帆船による所要時間は二日を要して始めて上海に到着するが、汽船は之に較べて三十時間で到着し、各々有利、不利がある。南京の交通は又、帆船、汽船、汽車の三種があるが、併し、汽車による米の運送が迅速にして運賃も低廉なので、實際上には只だ汽車の運送一つだけとなり、每石の運賃約三角(三十錢)となつてゐる。以上が要するに北路運賃の大略である。

南路に就て言へば、則ち米穀の運賃は、北路と大して相異がない。松江から上海に運送される米は帆船が多く、每石一角六分(十六錢)で、汽船の運賃は之に次いで每石一角七分半(十七錢五厘)にして、汽車の運賃は比較的安くて每石約一角三分(十三錢)であるに拘らず、事實上は汽車運送のものは極めて少ない。嘉興からの帆船による運賃は每石二角(二十錢)、汽船運賃每石二角四分(二十四錢)にして、汽車の運賃が最も安く、每石約一角七分(十七錢)となり、所要時間も亦、汽車による運送が最も尠なく、四時間半で充分である。江蘇、浙江各地の運賃を綜観すれば、大體、何れも每石二角(二十錢)前後にして次表は一見明瞭に之を示してゐる。

第三十表 江蘇浙江各地より上海に至る米運賃調査表

地點	運輸方法	運輸時間	運輸費用	途中納額	備考
蘇州	帆船	(1) 二日至五日	每石(海斛石、下同)・二二五	帆船運貨到滬貨物司在	船
	汽船	(2) 二十小時	(5) 每石 一九五	船上停留三五日、不另收	費、輪船火車、則須立刻起卸
	汽車	(3) 四小時	(6) 每噸(約十石餘) 一・六一〇		

無錫	帆船	(1) 三日至七日	每石 二二五元	輪船運米每石本爲二角、廿三年春季以後、因同業競走、降爲一角八分
常熟	帆船	(2) 三十小時	(5) 每石 一九五	
	火輪船	(3) 五小時	(6) 每噸(約十石餘) 一・八五〇	
	火車	(1) 二日	每石 二〇〇元	常熟火車不通
南京	帆船	(2) 二十小時	(5) 每石 二三五	
	火輪船	(4) 一日	(6) 每噸(約十石餘) 三・〇五〇	南京運米來滬、實際多由火車
	軍船			
松江	帆船	(1) 一日至三日	每石 一六〇元	松江運米來滬、以帆船最多、輪運較少、車運更少
	火輪船	(2) 十小時	(5) 每石 一七五	
	火車	二小時	(7) 每噸(約十石餘) 一・三四〇	
嘉興	帆船	(1) 二日至四日	每石 二〇〇元	
	火輪船	(2) 二十二小時	(5) 每石 二四〇	
	火車	(3) 四小時半	(7) 每噸(約十石餘) 一・七三〇	

(1) 風の順逆を見て定める。(2) 水深の浅き時は所要時間は比較的多くを要する。
(3) 今日の前午の汽車によれば翌日上海へ貨物は到着する。
(4) 今日の後午の汽車によれば明後日上海へ貨物は到着する。
(5) 内上海へ到着したものゝ倉敷料は・〇一五がある。(6) 内手数料・一五〇、揚卸料等・六五〇がある。
(7) 内手数料・一五〇、揚卸料等・七〇〇がある。

(二) 外省各地と上海間の運賃

我が國產出米の重要區域は江蘇、浙江兩省を除いた外には、安徽、江西、湖南の諸省があり、茲では姑く一地を取つてその間の運賃の差異を見ることにする。運賃の高低を調査すれば、運賃方法の外には路程の遠近があることも又、忽せにすることは出来ない。長沙（湖南省）と九江（江西省）は上海を距ること遼遠にして鐵道も不通であり、又帆船の便も不便である以上、その汽船運賃も長沙が最も遠くして每石六角（六十錢）、九江が稍々近くして每石四角六分（四十六錢）、蕪湖が最も近くして運賃も又最も安くして每石只だの三角七分（三十七錢）となつてゐる。併し、蕪湖から運送される米は大部は殆んど汽船を用ひず、帆船によつて先づ南京に運び、再び南京より汽車に乗せて上海へ運送するが、總費用は計每石約五角五分（五十五錢）にして汽船と較べて高いが、併し、帆船は各地のものを一船に滿載することが出来るので、比較的便利となつてゐる。この外、湖南米の省外輸出には每石護照費（パスポート）として一元（一圓）を納入せねばならず、安徽米は省外輸出には民國二十三年十一月一日より每石賑災糧として五升を醸出せねばならぬので、これらの額外の税金が上海米市場に於ける各省米の價格を增高せしめてゐることは疑ひなきところである。茲に、次に列表したもののは、その一斑を示すものである。

第三十一表 外省各地より上海に至る米運賃調査表

地點	運輸方法	運輸時間	運輸費用	沿途納稅數額	備考
蕪湖	帆船	八日	每石（海斛、下同）五〇元	自廿三年十一月	航船載量、普通五百石至

汽船	二日（一）每石	三七	一日起由皖出省	七百石、客家裝米、常於
帆船（蕪湖—京）	二日 每石	二五	時每石抽賑災糧	數地湊滿一船、如辨米集
汽車（南京—滬）	一日（二）每噸（約十石餘）三〇五	五升		中一處則以輪運較為合算
汽船	三日（三）每石	四六		現江西缺米、故無米運滬
長沙	七日（三）每石	六〇	湖南出境時每石	
			護照費一元	

（一）内船料及び其の他・〇七あり。（二）内手数料・一五、手数料・六五等あり。
（三）内上海に到着しての船料等・〇六あり。

(三) 上海より外省各港への運賃

上海は遠東の一大都市である爲めに水陸の交通は便利比類なきが故に、湖南、湖北、安徽、江西の各省の米穀は往々にして先づ、上海へ輸送せられ、再び上海より轉じて外省の各埠頭に運送せられ、以て消費、販賣に利してゐる。これら米穀は上海へ入港した時は、只だ海關（稅關）へ再び輸送のことを明らかに報告せねばならないが、十四日以内に於ては關稅を納入する必要がない。再輸送の所要時間は廣州、天津の五日間が最も長く、青島、福州は二日で、その他は何れも三、四日の間にある。即ち、運送費用から言へば、又廣州が最も多く、每石一元一角八分（一圓十八錢）、福州の四角一分（四十一錢）が運賃中の最低のものであるが、その他は何れも一元（一圓）以下、五角（五十錢）以上のもので、殊に六角五分（六十五錢）前後のものが最も多い。その中、香港の一港だけは、毎月米の運輸がないので古い運賃に據れば每石八角八分（八十八錢）であつたが、最近若し米の運送があるとすれば、

又この程度のものに過ぎざるものと思はれる。茲に各埠頭の轉口運賃を示せば次表の如くである。

第三十二表 上海より外省各港米運送費用調査表

地點	運輸方法	運輸日數	運輸費用	沿途納稅數額	備考
秦皇島	海輪	四日	每石(海斛、下同)・九〇元		運輸費用、本以每百公斤及每包計算、茲一併折合爲海斛石、每百公斤、約合海斛石一石一斗、每包即海斛石一石、蓋上海米糧交易、向以海斛計算、廿二年二月起、社會局通令改爲市斛、此後河米、即改用市斛、而外省到米、仍以海斛一石裝成一包、作爲計算單位
天津	海輪	五日	每石	・六五	
威海衛	海輪	四日	每石	・六六	
青島	海輪	三日	每石	・六五	
福州	海輪	二日	每石	・五八	
廈門	海輪	二日	每石	・四一	
汕頭	海輪	三日	每石	・六七	
廣州	海輪	五日	每石	・六七	
香港	海輪	四日	每石	・一八	
註			每石	・八八	

(一)各港の運送貨の中、何れも上海方面の幹料、荷卸料等が各石に付五分(五厘)を含んである。
(二)香港は最近上海から米を輸送されることがなく、運賃を記載したのは即ち往時に就て述べたものである。

(四) 外國各地と上海間の運賃

歷年の我が國各輸入の洋米は、正しく民食にあるのであるが、その米穀購入の方法は洋行(外國商社)の手を経て汽船によつて上海に運送せられた後、堆棧に倉入れされ、同時に購入者に米到着の旨を通知すれば十四日以内に倉敷

料を出さなければならない。倉庫よりの持ち出し費用は購入者から支給するが、各倉庫の持ち出し料は高低があつて同じでなく、每石約三分(三錢)乃至五分(五錢)となつてゐる。これら洋米は大部分は殆んど安南、暹邏(タイ國)と緬甸の三ヶ處より來るものであるが、産地と上海間の距離が不等であるが故に、その運賃も高い安いの別がある。就中安南の西貢が運賃は最も安く、每石四角七分(四十七錢)、暹邏の盤谷が稍々高く、每石五角(五十錢)、緬甸の仰光が最も高く、每石七角(七十錢)となつてゐる。その運送時間から之を言へば、また仰光が最も長く、二十四日となり、盤谷が之に次いで十五日となり、西貢は只だの七日間を要する。洋米の輸入に就て調査すれば、國産米と異り、必ず進口税(輸入税)、附加税、及び碼頭税を各百公斤計一・六五六海關金單位として納めなければならぬ。若し、現在の海關金單位を相場によつて換算すれば、各石計三元一角一分(三圓十一錢)となり、運賃を合算すれば、則ち、所要費用は何れも三元五角(三圓五十錢)以上となり、而かも、上海の洋米の市價がそれでも尙ほ國産米の價格と比較して廉價なのは又、一入注目すべき現象である。茲に各地の運賃を示せば次表の如くである。

第三十三表 國外各地より上海に至る運米賃調査表

地點	運輸方法	運輸時間	運輸費用(1)	沿途納稅數額(2)	備考
西貢	海輪	七日	每石(海斛石)・四七元	每石	三・一一元
盤谷	海輪	十五日	每石	・五〇	三・一一
仰光	海輪	廿四日	每石	・七〇	三・一一

(1) 原來各包は海斛一石を以て一包となる。

(2) 原來各百公斤は進口税一・五〇關金、附加税一割の・一五關金、碼頭税四厘の・〇〇六關金となつてゐるが、茲には各百公斤を以て海斛石一石一斗に等しくし、各關金單位を國幣二元に等しくして各石計納入の國幣數に換算した。

本篇の材料は多くは羊翼成、李浩春、汪浩の諸君から供給されたものであり、圖表は多くは周銘三、馮亨嘉二君が之が作製に當つたことを特に誌して置く。

昭和十五年七月十五日印刷
昭和十五年七月二十日發行

上海米市調査
定價一圓四〇錢

譯編者 鐵 村 大 二

東京市神田區鍛冶町
三ノ六(鍋町ビル)

印刷者 友 部 浩 幸

芝區新橋三ノ二〇

印刷所 株式會社 更生 社

發行所 東京市神田區鍛冶町三丁目六鍋町ビル
株式會社 生活 社

振替東京四三三〇一番

支那經濟資料刊行に就て

東亞新秩序の建設は新支那中央政府の成立によつて愈々具體的計畫的に進められるであらうが、その根幹をなす新支那の經濟建設こそ最も緊急且つ重大なる任務でなければならぬ。これ小社が新支那經濟の建設に必備の最も信頼し得る基本的資料として下記の二〇冊を逐次翻譯刊行する所以である。

- | | | | |
|----|------------------|----|-------------------------|
| 一 | 長沙經濟調査 | 一一 | 鎮江米市調査 (定價一・〇〇) |
| 二 | 重慶經濟調査 | 一二 | 無錫米市調査 (定價一・〇〇) |
| 三 | 涪陵經濟調査 (定價一・〇〇) | 一三 | 上海米市調査 (定價一・四〇) |
| 四 | 老河口經濟調査 (定價四・〇〇) | 一四 | 湖南の穀米 (定價二・四〇) |
| 五 | 萬縣經濟調査 | 一五 | 桐油 |
| 六 | 九江經濟調査 | 一六 | 河南・湖北四省棉產運銷 |
| 七 | 江西糧食調査 | 一七 | 河南・湖北安徽・江西小作制度 (定價二・六〇) |
| 八 | 江西米穀運銷調査 | 一八 | 河南・湖北安徽・江西四省土地 |
| 九 | 小麥及び麵粉 (定價二・三〇) | 一九 | 同 (下) |
| 一〇 | 蕪湖米市調査 (定價三・四〇) | 二〇 | タングステン鑛誌 |

CL Q 13-2-13

NO. 276



140

